

作
品
集



2019.1 ~ 2021.3

月明り

星は見えないのにその夜は明るく、底で眠っていたはずの土が露わになっているのを照らし出している。

踏むと、少し柔らかい。温かそうですらある黒土。

ここに彼の欲望とその末路が埋まっている。十六回目の夜だった。

罪の意識に疎いシャベルの縁が、また悪意なく一枚の草を切っている。現場をあとにしようと、思つて彼はもう少し深くそれを差し込んでから、意識をもここから切り離そうとするかのように、少しの土を返してシャベルを引き抜いた。そして、その痕を蹴つて消してしまう。

ふと、踵を返す片足に重みを感じて視線を落とした。薄汚れたスニーカー、それを握む指が青白くそこにあつた。

確かに、息の根の止まるまで殴ったはずなのだ。指は「彼」のものに見えた。背筋が泡立ち慌て振り解こうとする膝を笑うかのように、土から伸びる四本は頑なに離れない。その下からくぐも

った声がする。

月が綺麗ですね、と。

20190107

#月が綺麗ですねを1番ホラーに書いた人が優勝

星があまいのは僕らの仕事

そのままじゃ寒気のするほどさみしいのを

ナイフで割いて餡を仕込むの

だからこの傷をおぼえていてね

ぴかぴかと明るく

とろけるように甘いゆめに咲く

みにくくて愛おしい一つの深い傷のこと

20190110

“意味がない、美味しくない” って言わないで

20190111

今は嘘つきのイチゴ味がいい

他に与え生んだこころのすべてこそ生身の私 四肢よりたしか

20190212

眠れない浮き足立った夜に識る

20190321

“わたしはとつてもとくべつだ” って

かなしくて擦り切れそうな甘やかを

20190326

チョコにキャンディー、またチョコレート。

かのかげにつむぐせかいのいっぺんも

20191004

ほどけぬならばあててたちのは

君のいた記憶に突かれシャッターを切る

20191231

溜る情景 絵馬掛けの裏

「このクソ暑いのに手を繋ぐなんてありえん」

「全く同意だ」

私たちは汗をかいていた。二人して顎から塩分と水分を零して、炎天の下、この猛暑日に誓いを交わす。手を繋ぐのはやめよう。

「つか、今までは何で？」

「最初のデートで『手繋ご』って言ってくれたの嬉しくて」

「あ、ふーん…」

20190731

秋の味覚

秋風を浴びたい。

窓の外に大気の渦巻く音をききながら、私はぐずぐずとこねるように鼻をすする。風邪だ。季節の変わり目だ。加湿器がはたらく清潔な部屋で、健康的な空気を胸いっぱい吸い込んで高い空を仰ぎ見る日を夢みている。三日くらい前に出掛けていて、そのとき存分に楽しんでいるんだけど。

かちゃりと優しい音でドアが開き、大希が入ってくる。

「美羽ちゃん、熱はかろーね」

伝染るよって再三いったのに、今の通った声を聞くにまたマスクをしていない。一生懸命からだと振ってベッドの側についた彼の様子を窺うと、持ってきたトレイをサイドテーブルに置くところだった。ほら、マスクしてない。改めて注意しようかとも思ったけど、今の私の喉はひどく腫れていて言葉をつくれないうので、面倒になって諦める。知らないよ、もう。

「食欲ある？ お昼少なかったから、おやつにとって持ってきたんだけど」言いながら白いミニボウ

ルにスプーンを挿すので、重い頭を持ち上げてかろうじて中を覗ける位置まで身体を起こした。

「……！」

私は短い悲鳴を上げた。本当は「あー！」って叫びたかったんだけど、鷺鳥が絞められるときの断末魔みたいな音しかでない。ぎよっとする大希をよそに、側に置いていた筆談用のメモ帳をとり、あわてて書き殴る。

『アップルパイにするっていつてたやつ!!』

ひゅうひゅう言いながら全霊をかけてそのメモを突きつけると、ちよっと怯んで仰反って、それから困ったように笑った。「だって、喉いたいでしょ」

ボウルには擦り下ろした林檎が盛られていた。でも、だって。アップルパイにするって言った。それを楽しみにして、いちばんおいしそうな林檎を選んだのに。

ごめんね、悪くなっちゃうから、とふわふわ笑う恋人を前に私は涙目だ。私が、風邪なんかひいたから、たのしみにしてた予定がいつこ崩れた。なんだかそれが悲しくてしかたない。それに追いつきをかける高熱で、わけもわからず取り返しのつかないことになったような気持ちに苛まれて

いた。うそつき、って口をばくばくさせるのを読み取ったらしい彼が「また作ってあげるよ」と私を慰める。ああ、風邪なんかひいたから。かっこわるい。

「風邪ひきの美羽ちゃんが今いちばん美味しく食べれるようにって用意したんだ。いうない？」

三十九度の体温を抱きしめながら、三十六度の大きな身体がやさしく拍動する。ひとの肌はどんなときでも心地よくなるように出来ているのかななんて思って、少し落ち着いた。首をふる。のろのろと、肩越しには分かるわけなのに「よかった」って返ってくるから不思議だ。背中に目でも付いてるのだろうか。

きちんとベッドに座り直していただきますをする。スプーンで少しずつ繊維のくずれた林檎を口に運ぶと、やっぱりパイ生地の中できらめいてバターの香りを身に纏いながら焼き上げられるはずだった可愛い果実を哀れに思ってしまう。だけどふわふわと、きゅんとした味を連れて、舌の上から熱を取り去ってくれる素朴なデザートはやさしくやさしく私を励ました。

秋が終わる前に必ずもう一度迎えに行くからね。今度こそ、お姫様みたいな素敵なおやつにして

あげるからね。

結局ぐずぐず泣きながら食べている私を、彼もまた、包み込むように眺めていた。

20191010

タグ企画「メロウ・キッチン」

落紅

また一つ、季節が過ぎた。

西尾にとって季節とは女であり、また彼の仕事の期間でもあった。手にした札束のひとつを口座におさめながら、次の狩場を探さなければな、と考えている。

彼が結婚詐欺を始めたのは実母の浪費癖が最早後戻りできないところまで来ていると知った翌年だった。一般家庭にはとうてい返済しきらない借金を抱えていて、その貸し出し元も電車の広告にあるような社会的信用のあるところではなく、妻の悪癖に逃げ出したと思っていた父は担保として彼らに預けられていた上、とうの昔にバラされ売られていた。金にだらしない母親に飽き飽きして一人暮らしを始めた一ヶ月後、取り立てに来た白銀しろがねと唐とうにやさしく教えて貰ったその事實は、若千二十一歳の青年が真つ当な人生を諦めるのに十分すぎる代物であつたし、実際彼は簡単に犯罪に手を染め、取り立て屋のアドバイスに従つて利口に金を稼いでみせたのだつた。

顔の造形が整っていたことは母の与えた唯一の財産である。まだ若かつた西尾がその手の詐欺師

として成功するには風格と立ち居振る舞いに足りないところがあつたのだが、見目が良いためにいくらか釣れる女がいたのだ。初めは事後処理も危なっかしかつたけれども、素直に転落していく西尾を可愛く思ったのか白銀たちはその後何かと知恵を与えてくれたので、一年も経つと立派に詐欺師として完成し、今となつては彼に課されたぶんの返済額、減つてこそいないが増えてもいない。ある種安寧な生活を送ることができていたのだつた。

生きることは季節を繰り返すことなのだ、と西尾はさいきん考える。始まりがあつて終わりがある。また始まる。始めれば時間の流れに身を委ねて為すべきことを確実に行うだけでいい。そうしてすべてのタスクが済んだところに、終わりを作る。次の始まりの準備をする。その繰り返し。人を騙そうが法を破ろうが、健全に時間が過ぎ去るのであれば真つ当なこと何も変わらなかつた。否、おそらく真つ当な人生を歩んだところで、過ぎ去る時間が全てであり、入つては出て行く金の流れが呼吸のようにただ必要だけなのだ。喜劇も悲劇も、感情だとか恋とか、それらに全く意味はなくて、人はそこに何か夢想をするからいつまでも求めるんだらうと。

ATMを出て秋風に解放されると自身も自由になつたかのように、一瞬思う。自由の定義だけ、

西尾は掴み損ねている。流れにのって揺蕩うことはほとんど自由と変わらなかつた。その一方で、ときどき「解き放たれたい」と感じるのも確かなのだつた。これについて考えるとき、例えば仮に西尾が不自由だとして、自由になつたと感じたなら何をするかを想像してみる。大抵は何も思い浮かばないのでその疑問もまた重要なものではないのだと忘れることができたが、秋だけは駄目だつた。木の葉が翩られて風に遊ぶ音と、涼やかながらも味わい深い不思議な空気とを受容すると、西尾はひとりの季節を思い返して、なんだかそこに帰りたくなる……。

スマホに着信が入つた。発信元は流し見るだけでよくて、彼はすぐにそれを繋ぐ。「よーす、おつちー」白銀だ。

「お疲れ様です」

「振り込み」

「今しがた」

「お、さすがあ。今月もイイコでいてくれて白銀さんは嬉しいわ」

「恐縮です」

相変わらず感情がなくてイイね、などと笑う通話口の向こうは、以前からそんなような評価を西尾に下している。思うに、白銀は従順なのを好んだ。それも表情の読めない、由来が不明瞭な従順さだ。彼に付いている唐もそういう類の人種で、文句ひとつこぼさず白銀の指示通りになんでもやる。飲み物を求められれば自販機へ向かい、折れた鉛筆を渡されれば黙々と削り、邪魔なものを示されれば人でもなんでも消した。自己主張がない。これは嫌だとかあれが好きだとか、そういう。白銀のことを慕っているかどうかすらわからなかった。

「唐には」いつか彼は言っていた。「俺に隙があるときはいつでも殺して良いって言ってあんの」なんて返事したと思う、と続いた問いに、西尾は相槌のつもりで「はい」と応えた。白銀はそれを理解した上で、「今のお前とおんなじ返事」と口角をあげたのだ。「いいね、お前も、いつでも手のひら返してくれそうぞくぞくするよ」。

滞りなく進む会話の中で、ふいに、腰に何かがぶつかる。その生き物と目が合ったのと、「そんじやあ来月もしっかり励んでね、おっちー」と軽薄な挨拶を聞いたのが同じ瞬間。そしてぶつかってから一步も退くことのなかったそれが穴の空きそうなくらいこちらを見つめて声高く一言。「わるい

「ひとだ」通話の切れたことを知らせる音が警鐘のように繰り返されている。

「……なんでそう思うの？」西尾は微笑んだ。女たちにそうするように。

次に視線を合わせるためにしゃがみ込んだこの大人の顔を目で追って、幼子は首を楽にする。「わるいひとはこういう顔してるんだよ」

なるほど、優しそうな人でも警戒しなさいという教育を受けているのだろうか。今どきのこども園はきちんとしている。通話終了のボタンをタップしてから、お母さんは？と問いかける。

残念ながら警戒する素振りも見せず、足が遅いから置いてきたんだとその男の子は言い出した。それは紳士的ではないね、といつてやると、しんぴてき？と聞き返される。

「しんぴてきよりカッコいいのがいー」

「そう」神秘的、という言葉なら知っていること自体、このこどもの神秘のような気もする。「女の人は、自分に合わせてゆっくり歩いてくれる男の人をカッコいいと思うんだけどね」

彼は少し考えて、何も言わずに来た方向へと走り出した。母親を迎えに行くだろう。

———
君御くんは神秘的だね。

ああ、またあの季節。

小さく囁く、いとしい、声。その声音は聞いた者の好感度云々ではなく、形容詞として、「いとしい」と表現するのが適切な気がしていた。彼女はいつも正しかった。その正しさは抑圧的なものではなくて、花が咲いて枯れるのと同じ、自然でなにもものにも囚われない正しさだった。そして懸命に、西尾を愛してくれていた。これまで釣ったどの女よりも真つ当な女性だった。

その不幸なことは、西尾に恋をしてしまったことだろう。そして少し、一生懸命になりすぎて周りが見えなくなることがあった。肯定的な正しさ故に、西尾を怪しむこともできなかった。「生活を共に送っていると感じたいが、すぐに同棲はできない。だから先に、生計をひとつにしてみるのはどうだろうか」と提案したときも、彼女はぼかんとしたまま目を輝かせて、やがて潤ませ、頬を紅潮させて絶賛した。彼自身、彼女に金銭的な無理をいう手始めとしてはこれ以上のものはないだろうという自覚はあったが、それでも余程嬉しかったのだなと感心した覚えがある。今でもそのとき様子は目に耳に、残っている。

その年の紅葉は暮れには真つ赤だった。思えば出会いの頃から、そのように色づき始めていた。

……もう行こう。ここの空気は駄目だ。

薄く息を吐いて西尾は踵を返す。歩き出して少ししたところで、足音が心地よく耳奥に響いていた。走ってくる、おと。こちらへ向かって……。

何かが、ぶつかる。振り返ってそれが未来だとわかる。彼女は穴の空きそうなほどこちらを見つめて、それから思い出したように「包丁を、」と話し出す。

「包丁が、刃こぼれてたから、買ったの。……百均で、」

未来は地面があるのを確かめるようなおかしな足取りで、一歩二歩と小さく退いた。

西尾はそれを見ながら、何かおかしい、と思い始めていた。いや、おかしいことには間違いがないのだ。今見ているものは記憶の中の未来ではない。実物で、それがなぜ、現在も共に過ごしているかのような自然さで自分の目の前に現れ、今日の買物の話などしているのか。

未来は唇をふるわせている。「お、……」

「おはかな女だって、いってよ」

「……………どうして」

「騙されてるとも知らずに、って、笑ってよ」

「未来……………」

なぜだか呼吸が浅い。下の名前が、きみとみきで反対だねと笑い合ったことがあるのを思い出す。彼女が笑っていたのを、思い出す。……やはり今は現実なのだ。恐らくは、今、再会したのだろう。それ以外にない。

それ以外にない。再会、したのだ。見送ったはずのひとつの季節と。

「お金ぜんぶ盗られちゃったくせに、子供まで産んで、ばかだって、いつてよ」

未来はついにその場にへたり込んでしまう。……こども？ 耳鳴りがしそうだ。そういったものを残さないようにしてきた。たった一度を除いては。

頭痛のような痛みがしている。頭痛ではない。頭の中がぐるぐる掻き混ぜる。わるいひとはこ
ういうかおしてるんだよ。どんな？ 西尾の、顔の造形。知っていたのではないか。あのこどもは。
背中が熱い。

「いつか迎えに来てくれるって、君御くんのこと許せないのに、愛してるっていつてくれたの、忘れられなくて、ねえ、ばかだって笑ってくれたら私、君御くんのこと殺せてよかったって、思えるのじ」

幼い子の泣く声が遠くから聴こえていた。母親を見失ったのだ。戻って、抱きしめてあげてくれないだろうか。未来はきつと、うんと愛情を込めて子供を抱きしめるのだ。西尾にそうしたように。

ぎこちなく伸ばした腕が、彼女の細い身体にからみつく。背中に突き立てられた憎悪がこの身をあかあかと染めてゆくのを感じて、愛の在り処が分からなくなる。すべここに、あるのに。

すべここにあるのに。どうして手離してしまったのだろう。

(そうせざるを得なかったからだ)

西尾は真つ当ではないのだ。心から人を愛し、子を成して、それを抱きしめてやれるようなそんな幸福は用意されていなかった。断絶された二つが交わることは決してない。酷いと思った。なんて出来ない人生だろう。

風の香が滲みするような気がした。次に悪心がして、ついに西尾は腕の中のものを突き離してその

場にあらず。吐き出したのは血液で、それは地面をまだらに染めた。彼女の正しさの刃が、西尾の心の中を描写させるようだった。彼にとって一番美しい景色——
彼女と過ごした日々の色を。

20191023

頭を叩くように鳴るオルゴールの音
胸には何もない
私はあなたがもう一度死ぬのを恐れていた
何もない
詞は無くなった

目の前の現実の輪郭をとらえるのが怖いのだ
その向こうに見る幻想の景色の中
あのヴェールの奥　うす靄の色を
在処としていた

清潔な水音は潰れる音と似ている
解き放たれる　何かを背負うようにして
幻とこころの乖離したところが　その出口

20191204

「散句」

盗んだ

苦しい。頭^{かぶり}を退^{そむ}けて

痛かった。

隔てのある

幸福と

もう手に入らない

その絶望の全容を思い出す

夢みたうろこの泡沫と

隔壁^{まど}の外 煌く現実^まは

剣のように優しくない

遊泳^おいた軌跡^まは淡く見当たらない

出口はもうない

咎人の証しを身に附けて

肺で呼吸していた

20191223

「散句 2-3」

行き止まるスプーンがのせた

カラメルの苦みに

目覚める昨日の悪夢

20200109

かなしさは現にまとう色ひかり

空想あつて息をしていた

20200216

日々がただ尊いことを識っていた
こころは清か朝焼けに咲く

20200219

最初の朝

はっとしたとき、今香り立ったようにふわりと。視線を落としたところにあるカフェオレから湯気がたち昇って空気を白く霞掛けた。

呆気にとられている間に「やだみのり、今寝てた？」と声がかかるのをこの耳が聞いていた。どきどきと顔を上げると、母が自分の席に腰を下ろしたところだ。意を決して、はにかむ。

「そう、かも」

「眠いならこんなもの飲まずに寝ちゃいなよ。勉強は朝やればいいでしょ」

言いながら自分ではカルーア・ミルクを作ってマドラーでくるくるとかき混ぜていた。彼女は月曜日と木曜日が固定休みだから、日曜の夜にこうしてお酒を呑む。いつもは缶チューハイだったけれど、私がカフェオレをねだったときはそれに合わせてカルーアなのだ。きっと。最近になってそのお酒が甘いコーヒーの味がするんだと知ったので、そう思っている。

朝に勉強すればいい、は母の決まり文句だったけど、これに対して「起こして貰えればなあ」と

わざとらしく言って返すのがこちらのお決まりだった。そうすると「私が起きないわ」と笑う。結局私は眠気に負けて寝てしまっし、なんだかんだで母は起こしてくれられることの方が多かったけど、でも、明日はほんとに起きてくれないかもしれないから。それに今はそんなに眠たいわけでもなかったから、「夜の方が集中できるんだもん」と返事した。わかったようなこと言って、って朗らかにからかう声を心地よく聞いている。実のところは勉強なんかする気はなくて、この人ともっと話があった。 「頑張りなよ、受験生」なんだかまぶしそくに囁くので、落ち着かなくて苦笑する。

とろりと割り入った沈黙には温度があつた。私はその、流れ出る樹液のような夜に載せることのできる言葉を探している。口を滑りだしたのは、情けなくも不安だった。「まだ、ね」

「うん？」

「まだ、具体的にどんな大人になりたいとか、わかんない」

そんなもんだよ、と彼女はかんたんに言ってしまう。「私だって、まだわかんないよ」なんて微笑むのを不思議な気持ちで眺めた。

「そうなの？」

「そうだよ。いくつになってもそう。二十超えても三十超えても、どこに向かっているのかわかんなかったり、これでいいのか迷ったりしてるよ」

でもそのくらいでいいんじゃないかな。母は続ける。

「だってわかんなくて考えたり、迷ってうろうろした方が、いろんな経験できるでしょ」

「経験……」

彼女のいうことは、納得できそうですと瞬に落ちないままになってしまいそうだった。だって多分、私は悩んだり迷ったりしているときに前向きに物事を考えたり良くなっていくことを信じて彷徨うなんて全然できない。いま、出来ていないからだ。ただずっと、途方もない暗闇に放り込まれたみたいに戸惑っている。考えてどうにかなるものでも、がむしゃらに動いて切り開かれる景色でもないって、そう思うのは私がまだ幼いからだろうか。

マグカップの熱に指先を温めて、口に含んだ液体の複雑な味を脳が怠惰に分析していく。確実なのは苦みがあること。

「しなくてもいい経験って、あるでしょ」

「あるかなあ」

「あるよ。悲しくて、乗り越えたとしてもずっと『いい思い出だった』なんて言えない経験は、あるじゃん」

ちよつと怒ったみたいに捲し立ててしまって、途端に申し訳なくなって少し俯く。表情は見えないけど「あ、ほんとだ」と返ってきた声は相変わらず朗らかで、すこしも気にしていないみたいで、その神秘をおもうと泣きたくなった。やっぱりちゃんと顔を見ておきたくて彼女に向き直ると、考えているのか目を閉じて、椅子に背を預けていた。□元が微笑みをたたえていてむずかしい。

「私はさ、」また体を起こして、手元のグラスを見つめている。「今日のために悩んで、迷って、傷付いて、苦しんで、力が及ばなくてなんにもならなくて、不幸な目にいっぱい遭って……きたんだと、思えるんだよ」そうして私に振り向いたとき、彼女の背筋はしゃんと伸びた。

「みのりにこうやってさ、いっぱい愛をこめて話ができるように」

だから悲しい経験も一見無駄な経験も、どうしたって全部大切なんだって、言葉が継がれていく。それらの音は掴み損ねた私の手を撫で、夜に沁み込んでいくようだった。

「……私にもそんな指標がほしい」

それは少女だった私にとつて、きつと母のことだったのに。

「些細な夢でいいんだよ、そういうのは。お酒が飲んでみたい、って夢みるだけで、とりあえずは二十歳になろうと思うでしょ」左手のカルーアをちよつと掲げてみせる。

「……そんな簡単なことかなあ」

「そうだよ。身の丈くらいのおっきいやつは、叶ったときにようやく自覚できるから。安心して」

「身の丈に合わないおっきいやつは？」

「実は一生叶わない」

ひどいこと言う。そのまま感想をぶつけたら、楽しそうにからから笑って付け足した。「そういうのは案外自分が本当に望んでたものじゃない、ってこと」

そんなものだろうかと考えていたら、アルコールの残りを煽るようにして飲み切ってしまった彼女が、空のグラスを握る手でそのまま私を指さして、みのりはあれでいいじゃん、って言いながら椅子に片足を上げた。酔つとお行儀が悪くなる。

「白シーツ」

はっとして、慌ててそれを否定した。

「そ、それはもういいの!」

「なんで? 私がピンクの可愛いやつばっか買うからさ、もっとシンプルなやつがいいって」

「いいの! 無地だと汚れが目立つし、白なんて余計にだし、色がついて柄があるくらいの方が」
母はきょとんとしていたけど、やがて破顔して「経験してきたみたいに言う」って冗談めかした。

私はそれに何も言わなくていいように、残りのカフェオレを全部飲んでしまう。テーブルにカップが置かれるのをしっかり見届けてたところで「そろそろ寝なさい」と寢室へ促された。私は、シーツの話題が上がったことで自分の部屋のベッドが見たくなっていたから、大人しくそれに従った。

ダイニングを出る前に振り返ると母は二杯目を注いでいる。やっぱり不安になって、「明日起こしてくれる?」と聞いてしまう。彼女は、起きれないと思うな、って歌うように答えた。

赤い花が咲く桃色の、毛布に近い冬用の生地を撫でて眠った。

明日もこのままでいて、と願いながら。

目を覚ましたとき、視界は明るかった。近くの窓から太陽の光が入ってきて、それがシーツに反射するから、まぶしいんだって。私はもう知っている。

飛び込んでくる白色がみるみるうちに滲んでいく。そのまま顔をうずめて泣いていた。こぼれていく涙を染み込ませながら、やっぱりこのシーツは捨てよう、とどこか遠くで考えていた。お棺の色。死に装束の色。喪失の色。私はカルーアの味を知っていて、とくに受験生ではない。

彼女が死んで六年目を数える、最初の朝だった。

20200116

エブリスタ公式コンテスト「目が覚めたら白」参加作品

八月三十二日のライブ

八月三十一日のライブ。

炎天下だった。終わっていく夏を引き留めるようなすさまじい照射で、SNSを見ると次から次へと人が倒れたニュースが舞い込んでくる。そんな中で、そのとき私の目の前には、なんとかってというバンドのライブのために集まったらしい人の行列があった。

あごを伝って落ちていく汗がアスファルトの熱気に溶ける。ばかだな、って思っていた。音楽は聴くけどひとつのグループやアーティストを追い掛け回せるほど情熱的にすきだったことはなくて、こんな場所で群れていられるのも、そろいのTシャツを買う心理も、私にはわからなかったのだ。

車道を挟んだ反対側の歩道を、行列を遡るようにしてバス停に向かっていた。建物はあちこちにあるのに影はなくて、だから早く日陰に入りたかった。すこしの斜面がとても煩わしくて、車がじれったく風を切るのも、自分が着ている服が一定のリズムで揺れるのも、全部うるさい。向こうでざわめく列のことはむしろ呆れが勝っていて、これすらなかったらひたすら自分の戦いになるから

有難がってもよかったのかも知れない。

アプリのナビ通りにまっすぐ進んでいくと線路の高架が見えてきた。小休止だな、とうれしくなるのと同時に、このあとはまだ歩くなると打ちひしがれる思いがする。絶対にバスで移動するなんて選択肢は間違いだった。だけど目的地は駅から遠くて、バスを使う方が楽だと思ったのだ。今となつてはよく覚えていないけれど、予定外のこと起きて歩く羽目になったんだ。事前にきちんと計画を立ててから行動するタイプなのにその時になってそれらが全く役に立たなくなることはよくあって、たぶん危険予測が下手なのか最善解を目指しすぎて複雑すぎる予定を立ててしまうのか、そのどつちもかも知れないけど、そういう自分のことが嫌いで。

哀れな気持ちを抱きながらガード下に滑り込み、そこで一旦荷物を下ろす。二面を除いて空と隔てがあるからかいやに涼しかった。こんな排気の埃とかが多そうなところだと思いつつも、しばらくは先へ進むという選択肢が起き上がってこないことを理解してゆっくり水分補給をする。行列はここまで続いていて、ガードの日陰の一手手前あたりで途切れていた。

そのとき丁度、日陰の中から一人の少年が現れた。軽装で、黒いキャップと、Ｔシャツと、七分

くらのカーキのワイドパンツを履いた、スニーカーの。凛と上向いた綺麗な横顔が当然の様相で行列に加わる。それが妙に涼しげで、なんだか唾然としてしまった。

たくさんのノイズにまみれた夏が一瞬で黙った。

あれが、八月三十一日のライブの日だったことを覚えている。それ以外のことはあまり覚えていなくて、たとえばそのあとバスに乗ってどこへ行ったのかとか、曜日とか、散々目にした同じロゴとか、そういうのは何も。ときどき夢を見て、そこで私は反対側の歩道に駆け出す。躊躇いながら同じ列に並ぶけれどそこにはもう少年はいなくて、だけどそのまま物販へ向かう波にのまれていく。そろいの黒いTシャツを買って、ときどきしながらライブ会場を探すのに、気が付いたら誰もいなくて、入場口もわからない。結局私が得た少年のかげらはこのTシャツ一枚だと肩を落としながら、あとでゆっくり開封してロゴを眺めて、せめて彼の好きなバンドの名前を知ろうと思うのに、たいていほそこで目覚めてしまっってそれすら失ってしまう。

稀に会場案内のような簡易的な張り紙を目にすることがあって、「8月31日・32日両日開催」とだけあるのに気づくことがあった。だから三十二日もここに来れば彼に会えるかもしれない、もしかしたら一緒にライブに入れるかもしれない、なんて胸をときめかせてしまうから、起きた時の落胆はより大きかった。

あの日列はそのまま彼を最後のひとりとして動かなかった。だから私も動けないままだった、ように覚えている。

風も吹かない炎天下に、ばかみたいに列をつくるその一番後ろで退屈そうに穏やかに目を閉じた。先を見つめていたりした彼のことを、それからずっと、見ていることになったのだ。

20200220

即興小説トレーニング お題 「最後の男の子」 必須要素 「ノイズ」

春を知る種子

種運びの妖精たちの小さい手に零れる花弁。それが麗かな風に巻き上げられて素晴らしい、春の景色だ。

——と、古文の教科書でも謳われているというのに、現代において人々は種運びの節を目にすることができない。じゃあ教科書なんかに掲載するなよ。

かなたは頬杖をつきながらA5のページの端を不満げにばらばらとやっていた。妖精たちの節儀せつぎを観覧できないのは別に種運びに限ったことではないのだが、高等学校に入学して最初の単元で種運びの節の描写を読んでから今日まで、古文の授業があるたびになんとなく、未練がましく読み返してしまうのだった。

空いた席を引き寄せて、よくつるむクラスメイトがかなたの前に座った。遠慮のない両腕の侵入に教科書と自分の頭を避難させる。

「来週だな」

「何が」

「何がって」友人はせせら笑って言う。「春分の日。まあた藤原哀胤ふじわらのもたねのページ読んでんじゃん」

閉じた教科書をとんとんと指先でつつきながら揶揄ってくるのをあなたは不貞腐れて返事しなかった。この男は、四月にあなたが彼のか一節に深く心を奪われたことを分かっているのだ。別に恥ずかしがることじゃない、純粹なのはいいことだと言いまするが十六にもなって「純粹で良い」なんて評価は複雑だし、そのことだって分かっているに違いない。

今年の春分の日は二十日だ。明日十日に終業式があつて春休みに入り、そこから数えてちようど十日後。応えるようで面白くないが、自然と視線は校舎裏の霊域へいつてしまう。

友人はさらにずいと身を乗り出し額を寄せてくる。そうして声を潜めて言った。

「見に行かね？」

す、と瞳を三日月のかたちに細める彼に、あなたの方は目を見開いて咄嗟に声も出ない。「ば……」

「馬鹿、何言つてんだよ……」

「もう成績表も出た後じゃん？」

「法律違反だつて！」

出来る限りこちらも声を潜めるが、熱が入って擦れる。とくに素行に問題ない生徒でいたかなたにとつて、その提案は相当思い切つたものだ。

しかし友人はすいぶんあつけらかんと「たまにはよくね？ 一個や二個くらい」なんて言い放つ。こんな不良と友達だつたのか、と愕然としているうちに、相手は立ち上がつて「じゃあ夜明けに現地集合な」と簡単な約束を勝手に取り付けていく。

当日。三月とはいえまだ冷え込む早朝に、かなたはひとり校舎裏に立つていた。顔を埋めたネックウオーマーが吐息の湿度を持っているのを感じながら、人より寒がりだと言われたのは晩秋だつたらうかと考える。ユキか、確か舞斗まいと。どっちだったかはつきり覚えていないが、年寄りみたいだつて笑われた。あの二人のほうが子供の体温なんじゃないかとかなたは思うのだが、少なくとも自分より寒がりだと知っているのだから早めに来てほしい。

遠く空が明らんでいるのを眺めて、吐き出した白い息を翳す。呪文もないうちからそれらは幾つもの雫となり、固着をさせないからぱたと土に落ちていった。呼吸が見える、対象の定めやすい冬だから幼児でもできる魔法あそびだ。俗に朝露と呼ばれるこの生命の雫は、きちんと回収すればあなたの履修する植物術全般で頻繁に使う材料となる。学校のあるうちは季節問わず早起きして朝露を作っては瓶に貯めていたが、春休み中はコースの自由研究で使う分しか必要なくてやらない。とはいえ勿体ないような気もして、眠つぶしにいくらか固着させてジャケットのポケットに入れておくことにした。

その一時間ほど後になって、あなたは何気なく起こした自分の行動に感謝していた。すっかり夜の空も姿を隠してしまったというのに呼び出した本人が一向に来ず、しびれを切らして一人で霊域の雑木林へ踏み入ったところ、獣道のひとつもないから魔法で植物を変容させる必要ができたのだ。物理的に分け入ってもよかったが、痕跡を残したことによって教師にばれるのを心配したのと、そもそも枝を折って草を踏みじることができたらかなたは植物術コースになど入っていない。通っていた幼稚園の先生曰く、踏まれた雑草をはたから癒して回っていたかなたである。将来の夢は

お花を助ける魔法使いと書いていたのを今でも微笑ましいエピソードとして母に度々持ち出されるのを、覚えていないと跳ね除けながら本当は握った鉛筆の硬さまで記憶に残っているから、植物に蛮行をはたらくくらいなら高校生の拙い魔法を駆使するのだ。……もちろん、霊域に侵入しない、という選択肢もあるのだが。

夜が明けきった時点で帰ればよかつたんだよな、と自分に呆れつつ、定期テストのときよりもよっぽど集中して呪文を組んでいく。寡すくない雫でより遠くへ進めるよう、慎重に。

やがて林を抜けると、そこは小高い丘になっていた。

既に庄巻なのは、あらゆる花が一面に、寝覚めに咲き誇っている景色である。静謐と清廉のすべては、人から隔離された精霊の世と呼ぶに相応しい。かなたは声のかかるまで、その風景に見入っていた。

「やっと来た」

気づくと花畑の中に一人の生徒が立っている。驚きながら「お前、」と言いかけてふいに疑問に思

う。

まるでこの景色の一部だったかのように現れたその人物はユキでも舞斗でも、他の友人でもない。あれは誰だ？

「夜明けに目覚めるところも美しいのにな」

慈愛のまなざしが足元の花々へ流れ落ちる。するとそれに応えるように、ひとつの淡い光が宙に浮いた。魔法の露光にも見える甘いレモンイエローは次々と現れ、やがて丘いっぱい広がっていき、近場の光を見下ろすと、ひとの靴ほどのちいさな存在がにこりとかなだに微笑みかけた。

——妖精だ。

「朝露を分けてやって」

友人が言う。戸惑いながら残りの栗を全部とり出すと、次いで彼は「風を」と遙か彼方を示した。

「風って……」種運びの節に風。ただの風のことではない。「まさか、大気興しを？」

「そんな大変な魔法、俺にできるわけ……」

「あれだけ丹念に想像を膨らませてんだ。できるわ」

笑って、勿体ぶるように両手を広げる少年の姿。制服のブレザーの裾が持ち上がる、確かにうつに在る中で彼が朗々と詠ったのは、かなたが春夏ひととせ秋冬焦がれた届かずの世。

裳胤の一首。

野にいつる御霊のたより花まきて

うららかなる風をかし春かも

胸に湧き上がる、それこそ春風のような感情を。いまきつと逃すわけにはいかなくて、頭が真っ白になりながら、術を綴った。春風。暖かく、明るく、命を揺り起こし、育む。古の時代から変わらない大気の恵み。いのちの便りをのせる、そう——はじまりの。

手の中の雫を撒いた。それを巻き上げるようにして、力強い温風が丘の向こうからやってくる。大気が応えたのだ。信じられない思いで空を仰いでいると、やがて一斉に飛び交い始める、種運びの妖精たち。その光からいくつもの花卉が溢れて、視界を覆い尽くしてしまいうちに、かなたに春

を魅せる。

「……………裳胤つて名前は、この役を戴いたときに帝から賜ったものなんだ」

いつの間にか彼は隣に腰掛けて、同じ景色を眺めていた。懐かしそうな眼差しがあなたを見上げ、
「まあ座れよ。ゆっくり話そう」と微笑む。

「……………いつから？」

「最初の春の抜ける頃には混じって話してたよ。気づかないもんだな」

気付けるかよ、と思うも口にはしなかった。それなのにこの男は笑うから、多分あなたの心情をわかっている。悔しいので「ファンですって言ったほうがいい？」とぶっきらぼうに投げかけるが、
「よおく知ってる」と返されてしまってもならない。

もうこんなに居ない、とどこか得意そうに空を見るのを、あなたも追って見渡した。光はほとんどどこかへ行ってしまうと、花弁だけが風に遊び続けている。種運びの節の大気興しは、できるだけ遠くへ送ってやるのが重要なのだという。節儀で御霊が拡がったぶんだけ、その春の種子は新しい地へ根付くことができるのだ。「霊域の保護のために人界と隔絶して廃れた役だけど。本当は、

術士が手助けしてやったほうがいい」言いながら彼の指先があなたの額に触れる。

ああ、今は魔法使いって呼ぶんだっけ？

溶け入るような声音は額からゆっくりと、あなたの真名へ舞い降りてくる。天命を賜った名を託して、閉じた瞼を上げた頃には袈裟はかげも残さなかった。

けれど確かに胸に根付いた種は、あなたの往くべき景色を知っている。

20200307

KAC2020参加作品 お題「拡散する種」

Signal : ALIVE

真っ白に曇った空が視界の全てになった。

一瞬の出来事、イクは綺麗な放物線を描いて落ちていく。

どしゃ。

落下した先で慌てて起き上がりきよきよと辺りを見回すが、見慣れない、複雑な道が四方八方に伸びていた。アスファルトを区切る白い歩道や花壇。『した』の景色だとようやく気づいて、イクは上方を仰ぐ。白いコンクリートの高架から、細かい走行音が合奏になって微かに聞こえていた。

放り出されたのだ、と思い至って、ハイウェイに戻ろうと跳びあがる。が、ろくに高さも出ないまま再び地面へ落ちてしまう。もう一度試すが道路の肌も見ないうちから壁に縋り付いて墜落するしかない。右脚のベアリングがずっときゆるきゆると悲しい音を出していた。イクは気づいていなかった。

「ん!？」

失敗しか得られない無駄な挑戦を繰り返していたら、急に背後から撥音が襲いかかってくる。びつくりして振り返ると、そこには人間の少女がひとり。肩にかけた鞆を抱きしめて、目を見開き、まるで憤然としているかのようですらある驚愕の表情でその場に大股を開き立ち尽くしている。

これは、イクを怯えさせるのに十分だった。人間に怒られたら廃棄だ。スクリップ 負った役目が極端に人と接する機会の少ないものだから、仲間内でそんな噂が実しやかに囁かれていた。

弁明しようと口を開いたイクは、しかし「あいあい、あやあや」と言語にならない音声しか出すことができない。落下した際に発話機能を故障したのだった。パニックに陥っているうちに、少女がちいさな体に見合わぬ強い足取りでイクの元へやってくる。

そして、曇天に突き刺すような声で叫んだ。

「エレキドールだー！」

イクは、もう泣きそうだった。人間ではないので涙はでないが、心の上ではそうだった。

がしりと肩を掴まれ、「すごいすごいー 初めて見たー」と揺すられ、「どうなってるの？ あなたなんて言うの？」と腕を引かれ背中を返され、やがて少女がイクの型番を見つけてさらに声を上

げる。喜んでいるのだと判断できる余裕はない。「びびるす……」と拙い舌が綴るのを聞きながら、
ドハース
DRRSです、と祈るように考えるので精一杯である。正確には DRRS505-19、というのがイクの
型番で、DRRSはファミリー名なので名前で言うなら19が該当する。それで仲間にはイク、と
呼ばれているのだが、少女に伝える術はない。

少女はその後大喜びでイクのボディを観察しまくり、しまいには「私のお家へ行こう！」とぐ
いぐい手を引つ張っていく。首を振って嫌がる素振りを見せてみたが全く相手にされず、仕方ない
ので大人しく着いて行くと、少女は純家庭的な芝生の庭のある一軒家へ入っていった。

「ただいまお母さん！」

玄関に投げ入れた声に應える「おかえりなさい」が、そのまま「いく」と呼んだのでイクは驚い
た。首を傾げていると少女の母親が出迎え、「えっ！」と悲鳴を上げる。

「やだ、いくるー！ 何この口ポットー！」

「お母さん知らないの？ エレキドールだよ！」

「そうじゃないでしょ！ 元の場所へ返してきなさい！」

少女は「やだもん、でぶるすといくはお友達になったの」と歌うように言いながら、母親のそばをすり抜けダイニングへと入って行く。もちろんイクを連れて。

ひとりの男性がダイニングテーブルの席についており、コーヒーを飲みながら読み物を眺めている。それに対し「お父さん！」と呼びかけるのでイクはこれが少女の父親だと理解した。そして彼も、「いくる、おかえり」と答えるので、ここでやっと少女の名前が「いくる」というのだとわかる。

「いく」は彼女の愛称なのだ。

「お父さん、エレキドールだよ」

「パパからも言ってるよあ、なんでこんなの拾ってきちゃうの」

姦しい声が浴びせられるのを涼しい顔で受け流しながら、彼はイクを少し調べた。「DPRSの505型か。いくるより三歳くらい年下だ」母親がそんな話はしてない、と文句を付けているが、少女は嬉しそうだ。

「エレキドールは私たちの生活の電気を走って作ってるんだよ。そうでしょ？」

「よく知ってるな」

「学校で習ったよー！」

「そうかあ、ちゃんと覚えて偉いな」

父親のイクの扱いは少女のものよりずっと丁寧で、整備士たちと似ていた。「父さんが生まれる前からいまではでかい自動車が一般的だね。それが遠くまで行くための道が高速道路だったんだが、今はミニEVが主流だろ。物流も変わったし。でも各地に張り巡らせた高架道を壊すのにも金が掛かる。それよりも新しい発電機関を敷いたほうが安く済むし今後のためだつてんで、走行発電のための電力供給機関ジェネレーターに生まれ変わったんだ」

それに色々な企業が投資してハイウェイでの発電用走行車を開発し電気事業を展開していったがある企業が発電走行人形エレキドールを開発してから………なんとかかんとか。彼の話は淡々としかし深い情熱を持って続いていくが、彼の妻どころかエレキドールを持ち帰った娘までもが途中で飽きて聞いていない。イクも、身近な話ではあったがハイウェイの話が出てきた時点で在るべき場所が恋しくて

仕方なく、聞き入っていられる心持ちではなかった。

「右のタイヤがダメになってるな」

意識を引き戻したのはこの言葉だ。自分でも確かめてみると、カバーが破損して軸が歪になって
いる。軽く回してみると異常音があった。

「もう走れないの？」

少女の問いかけが、イクに重くのしかかった。走れない、というのは走行発電を目的としている
エレキドールにとって存在意義を失くすことに等しい。彼女の父親を絶るように見る。ここまでの
振る舞いから、彼は電力供給機関の関係者なのではないかという希望が芽生え始めていた。

「ときどきエレキドールが放り出されるニュースはやってるけど、復帰はするよ」

だが、その手は離れていく。

「そもそもエレキドールには自己修復機能がついてることが多い。ハイウェイで電力を生み出しな
がら、自分で修理するんだ。DPRSにも498型から搭載してるはずだから、こいつもあるんじ
ゃないかな」

少女がその話を聞いてすごいすごいとまた喜んでるが、イクは絶望的な気分だった。自己修復はハイウェイ上で半永久的に走行していることが前提条件の機能で、ここでは使えない。使うには、自力でハイウェイに戻りある程度の距離を走行しなければならぬのだ。あの断絶的な高さを思い出すと目眩がする。戻ることにすら。

「ハイウェイで走るためのロボットなのに、放り出されるの？ みつともない」

母親の声がキッチンから飛んできて、さらにイクを苛む。人間ではないので、涙は出ない。

少女の父親もハイウェイに戻らなければ自己修復できないこと自体は知っていて、まずはハイウェイに戻してやらないとな、と少女に話した。

「その前に、こいつを動かす電力もチャージしないと」

「え！ 動かなくなっちゃうの？」

少女と同じくらい、イクは驚いた。駆動電力も普段は走行しながら得ている。メンテナンス・ピ

ットで稼働するだけの蓄電は出来るから、手順を踏んだシャットダウン以外でシステムが停止する経験をしたことがないのだ。にわかには恐ろしくなって、少女とその父親の顔を交互に見、自分の心境をアピールする。いまいち伝わっている様子はない。

「どこに行ったらチャージできる？」

「スタンドで十分できると思うよ。右は駄目だが、左の足で供給機に触れば」

「行こう、でぶるすー」

再び手を引かれ、先程の道のりを逆走する。ダイニングを出る直前、「エレキドールがスタンドでチャージするの？ 作る側のくせにね」という母親の可笑しそうな声が届いてしまって苦しい。

少女は自分の端末でスタンドを検索し、こっちだよ、とイクを連れて行く。なんとも頼もしかった。

「ありゃあ、エレキドールじゃないっすか」

二人を迎えたのは接客用アンドロイドだった。充電したいの、と用件を告げる少女に目線を合わせて「お金あるつすか？」と問いかける。自慢げに端末の画面を見せて、「ありゃあ！ お金持ち！」と褒められた少女はご満悦だ。

「右足が怪我してるから、左でチャージするよ」

「ええ、どれどれ。あらほんと！」

供給機が充てられるので、イクは左のタイヤを回す。その間、アンドロイドは物珍しそうに右の故障を見ていた。

「これ走れるんすかあ？」

アンドロイドなだけあって表情豊かである。訝しげな眼差しは少女の母親の言葉とよく似ていた。これに答えたいが、イクの発話機能はやはり「あう」とか「ああ」とか言って用を為さない。「しやべれないんすか！」と大袈裟なりアクション。

「エレキドールって喋れるの？」

「お嬢ちゃん、身体の異常を人間に伝えるには人間と同じに喋れなきゃ無理つすよ」

「そっかあ！　じゃあ、治ったら喋れるねー！」

「無理っすよお、この足じゃあーんな高いハイウェイには戻れないっす。だから中古ペットになったんすよ」

中古ペット、という言葉に首を傾げるイクをよそに、「違うもん、現役なのよ！　ハイウェイから落ちてきたの。私見たもん！」と少女がくいかかる。「ありゃあ、じゃあ拾っちゃ駄目じゃないっすかー」「すべハイウェイに返すからいいの」

アンドロイドは再び、じっとりとした目でイクを見つめた。そして不意に、通信アクセスが入る。会話を理解しているかどうかの問いかけだったのでYESの応答をすると、彼は今度は目を伏せ、幾分か声のトーンを落として続けた。

「でもね、落下したエレキドールは復帰してももっかいハイウェイから落っこちるのが58.82%、走行中致命的な故障を起こして廃品になるのが41.17%っす。技師が直せば話は別っすけど、企業がそんなお金かけるのはよっぽど博打レックスで名の売れた、ファンのあるエレキドールだけ………わかるっすか？　どっちみちこいつは引退するしかないんすよ」

次に彼がこちらに顔を向けたとき、その瞳に浮かぶ色は憐憫だった。「お前も、無理に戻ってぶつ壊れるくらいならこの子の家族に加わった方がいいんじゃないすか？」

発話と同時にイクに届く通信がある。

曰く、ペットロボット愛玩機巧人形への転身申請を推奨、と。

『中古ペット』の意味を理解してイクの頭は真っ白になった。エレキドールとして生まれた意義を捨て、エレキドールの名すら捨てて、この役立たずの身体のまま余生を過ごす——そういうことになる。無意識のうち、首を左右に振っていた。一歩二歩と後退してチャージの供給機から降りてしまうので、あっとアンドロイドが声を上げる。そのときにはもう、イクは逃げ出していた。少女の声が追い絶ったが、聞こえもしない。

下道は複雑に分かれ、障害物ばかりで、どこへ向かうかという思考処理がうんと難しい。ある程度スタンドを離れた位置でついにイクは途方に暮れた。

見渡すと視界の上ではハイウェイの高架が発見できたのでとりあえずその方向へ進んでみよう

タイヤを回す。と、例の異常音を改めて自覚してしまっ。

——再落下の確率が58.82%。

イクは自分がどうしてハイウェイから放り出されたのか覚えていなかった。いつも通り、オペレーションに従って走行していたはずなのだ。身体に異常はなかったし、問題の右脚も直前まで修復が必要になるようなエラーは出ていなかった。突然、なんの前触れもなく、気がついたら宙に投げ出されていた。

根拠はなかったが再落下はほとんど免れないだろう、という気がイクにはしていた。異常がなく落ちてたなら、故障している現在ではそのリスクはうんと上がるだろう。それにもしこれが自覚できない症状に起因するものであれば、たとえ現在の故障を完全に修復したとしても落下の防衛策にはならない。だったら、所有企業としても一度落下したエレキドールをハイウェイから降ろす判断はやむ負えないものだろう。

そして、復帰しても致命的な故障を起こすのが41.17%。今はまだ自力で走行できるが、それすらもできないガラクタになるといことだ。

つまり発電走行人形としては、99.99%の死が待っている。

死。

目の前が真っ暗になりそうだった。やがては故障して次世代へ役目を引き渡すのだと理解してはいたが、もっとずっと先のことだと思っていた。それまでは、自分が最新だったころの誇りとずっと一緒にあのハイウェイを走り続けるはずだった。開発者たちがいつぱいの愛を込めたこの身体で、人々の生活を支える立派な役目を堂々と果たしていられるはずだったのだ。

ぶっ壊れるくらいなら、と言ったアンドロイドの音声が思い出される。通信で得た文字を再現すると、ひやりと冷たいものが感じられた。

『ハイウェイで走るためのロボットなのに』少女の母親の声が蘇る。そうして次々と再生される、イクを苛んだ言葉たち。

『エレキドールがスタンドでチャージするの？』

『みっともない』

『推奨 愛玩機巧人形への転身申請』

『もう走れないの?』

……もう走れないのに、みっともなく中古ペットとして生きていけるだろうか?

イクはのろのろと、寂れた工場街を走っていた。街のナビゲーションシステムはホログラムになって迷子を誘導する。ひとつの工場の前までイクを案内すると、仕事を終えて消えてしまった。

がたん、がたん、と恐ろしい音がしていた。蒸気機関スチームエンジンの様相を呈した佇まいはそれだけで、用をなさなくなった自律機械ロボットの存在を許さない威厳のようなものがある。死人のような目でそれを見上げていたイクは、やはりのろのろとそこへ入って行った。なめらかに曲がった角の壁には電光掲示板があり、「ハイキ、コチラ」「コチラ、ハイキ」の文面が交互に映し出されている。

施設内に入ると大勢の廃棄ロボット達が事前講習を受けていた。前方に、この場を管理しているらしい人型ロボットが立っている。それは女性の音声と通信アクセスとの両方で集まった廃棄ロボットに語りかけている。

「改めて、お勤めご苦労様でございました。貴方がたは世のため人のためによく働き、まさに身を削って与えられた役目を果たしたのです。大変立派なことです。どうぞ誇りに思ってください。さて、ここからですが、スクラップの皆様は分解ばらす予算も与えられておりませんことから、再生金属として生まれ変わっていただきます。まずはこの先のプレス場にて皆様をペしゃんこに致しましたのち、溶鉱炉でどろどろに溶かして不都合な成分をろ過します。出来上がりは不純物の混じった金属ではございますが、昨今では大変エコかつリーズナブルな素晴らしい素材として引く手数多の人気者です。輝かしい未来をお約束しますので、どうぞ安らかにお眠りください」

彼女の声は暖かく、その言葉は優しくイクに響いた。役立たずはペしゃんこになり、どろどろに溶かされたら、輝かしい未来。

スクラップのひとりが質問する。「ボクはエレキドールになるのが夢だったんですけど、エレキドールの素材にも使われていますか？」

「はい、もちろんでございます。企業の皆様はこぞってエコならびにリーズナブルに群がるものですから、既にハイウェイを走っているエレキドールにも再生金属は使用されておりますよ」

質問者の嬉しそうなため息を夢心地に聞く。

スクラップたちはベルトコンベアの上でお行儀よく並んで、プレス場へ進んでいった。ういーん、がしよん。徐々に近付いてくる絶対的な音色にイクは酔いしれる。ういーん、がしよん。ういーん、がしよん。役立たずはぺしゃんこに。

プレス機の入り口の前には検品機械たちがずらりと並んでいる。一番手前の検査機の前まで運ばれると、「あれ!？」と素っ頓狂な声。

「何、君、まだ全然綺麗じゃない！ ジャンクはこっちじゃなくて、反対側の施設だよ」

隣の検査機も何事かとこちらを見た。「おや！ほんとー!」

「505番のDPRSかい。綺麗なはずだよ、まだ五歳だもの！ハイウェイからおっこちた？」

「右脚がイカれてるみたい。きつとそっだよ、可哀想に」

「よかったねえ、これだけ他が綺麗なら再生金属になんかならなくたって色んなものに生まれ変われるよー!」

「思考システムはアンドロイドだ」

「ご立派！ 外装はそのままエレキドールのレプリカに使って貰えるねえ」

「駆動システムはミニEVに移植できるぞー！」

「他だって、丁寧に分解して溶かせば電子レンジくらいにはなれるよー！」

とんとんと進んでいく話にイクは戸惑っていた。アンドロイドにもレプリカにもミニEVにも電子レンジにもなりたくない。必死でプレス機を指差し、両手を上下に打ち叩いてぺしゃんこになりたいのだと訴える。

そうしたら二つの検査機は押し黙った。やがて奥のほうで口を開く。

「なんだいお前、たかだか五年しか人様のために働いてなくせに、他の働き方じゃ嫌だって？」

そのとき、急にプレス機の入り口から悲鳴が聞こえてきた。この声には聞き覚えがあり、注視すると先程の事前講習で質問をしていた二足歩行ロボットのようだった。「やっぱりやだよー！」

「死ぬのはやだ！ エレキドールになれなくてもいいから、潰さないでー！」

暴れるロボットはラインの上から自力で逃げ出すこともままならず、抑えるまでもないから検品機械たちは誰も意に介さない。イクを調べていた先程の検査機が、あーあ、最近のロボットは甘っ

たればつかだね、と呆れた声で呟いた。ラインがひとつ前に進む。彼はプレス機の中に取り込まれてもなお叫び続けている。

「死にたくない！ 助けてよ！ なんて棄てたの！ やだ！ やだ！ やだあー！」

ひとつひとつの叫びがイクの頭に突き刺さり、死に対する恐怖が克明に呼び起こされる。

ういーん、とプレス機が深呼吸したのを聞き取って、イクは声を上げ逃げ出した。プレス場を抜け出す直前、がしょん、という音が確かに工場に響いていた。

市街地まで出てくることができたのと殆ど同時に、いくるがイクを発見して駆け寄ってきた。「でぶるす！」一日越しの声がひどく懐かしい。なぜだか無性に、自分の名前が少女と同じであることを伝えたくなくなった。

「あのね、私思うの。速く走ったらだめかもしれないけど、ゆっくりなら、いいんじゃないかな。ゆっくりなら、落ちちやったり壊れたり、しないとと思うの！ そしたら、ずっと現役でしょ？ そ

うだよね？」

再会の喜びに先駆けるようにして少女は興奮して話す。イクの手をとって、さらに重ねた。

「だから、ハイウェイに戻ろう！」

少女はイクの手を引いて、予め調べておいたらしいハイウェイの登り口まで案内してくれた。基本的には封鎖されているものだが、少女の父親が話を通してくれてイクが登る許可が降りているとのことだった。加速を促す緩やかなカーブの先には、行手を阻む門はない。

先程の少女の提案は、実際は現実的なものではなかった。ハイウェイでは最低速度が決まっていて、時速五十キロメートル。故障を起こさない安全な速度はどんなに速くてもせいぜい三十キロ程度だろう。イクはそれをわかっているので、慰めにもならない。けれど。

そっと、少女の手から離れる。右脚を浮かせて空回したベアリングはやはりきゅるきゅると鳴るが、しっかりと地面を踏みしめた。

待っているのは99.99%の死。そして。

「……………ああ、ああああー！」

イクは壊れた声で叫んだ。二足で加速をつけ、ベアリングを回し、坂を駆けあがってゆく。上を向いて、雲の切れ間めがけて声を突き刺すように。一滴の雨が泣いてるみたいに頬を滑った。

0.01%の輝かしい未来を掴むための戦いが、いま始まったのだ。

20200321

エブリスタ公式コンテスト「負けられない戦い」

塩味

映画のタイトルが読めない。

色のない映画館の前にいた。そこに大きく掲げられた映画のタイトルが読めない。

「すみません。看板の、読めないタイトルの映画を見たいです」

「チケットを一枚引いてください」

ポップコーンの香りのするカウンターで黄色いチケットを引っ張る。読めない映画のタイトルと、読めないシアター番号と、読めない座席番号。スタッフの顔を窺うと、入場口を指差して「適当なところに座れば」と言う。ああ、それでいいんだ。

暗闇のなか絨毯を踏み締めて、一番奥のシアターへ入る。既に上映の始まっている謎番シアターはスクリーンと映像が逸れていてやる気がない。一番後ろの右から二番目に座る。

どかりと、すぐ隣に体の大きい男性が座った。

「お姉さんこれわかるの？」

「わかんないです。タイトルも読めない」

急に、「馬鹿だなー」と叫ぶのでびっくりしてしまう。彼はポップコーンを抱えているけど、手を突っ込んで掻き回すだけで口に入れない。

「馬鹿だ馬鹿だああいやだ！ これだから遽者は！ なんで来た！ なんで来た！」

ぐるぐるぐる。紙カップのふちから踊るように落ちていくポップコーン。あっという間に私の膝を埋め尽くしてしまう。私はそれを眺めながら、塩味、と思う。

画面には侍がいた。「デュエル！」と叫んで兎に斬りかかっているの、たぶんデュエリストなんだ。ほとんど悲鳴みたいな声をあげながら揺れる男性は、このシーンに高揚してるんだかまだ私に怒ってるんだかわからない。

なんにもわからない。席を立てて奥のシアターを後にする。

次に手前のシアターに入ると、何も上映されていなかった。しかし満席で、人々は泣いている。どうも大いに感動しているらしかった。

さらに別のシアターを訪れると、とてもすぐよくわかる普通の恋愛映画をやっていた。一般常識的にはとてもすぐよくわかるけど、私にはキスもハグも気持ち悪くてわからないので、結果史上最悪の意味がわからなかった。カウンターに戻り、スタッフに声をかける。

「意味がわかりませんでした」

「そうだろうね、そうだろう。腹が立つ」

何気なくポケットに手をつ突っ込むとライターが出てきた。手に持って相手のほうを窺うと、向こうもライターを取り出す。

燃やしましょう。

私より一歩早く相手が私の服に火を付けた。それならばと思って私も相手の制服に火を付ける。私たちは火だるまになり手を取って踊った。楽しい！

「楽しい！ 楽しい！ 腹が立つ！」

「なんにもわかんない！ なんにもわかんない！」

「アッハッハ！」

ダンスは激しくなり火の粉を散らすので、映画館の絨毯に燃え移る。施設の絨毯は防災加工をされていなければいけません。とつてもよく燃える。

やがて観劇中のシアターも全部火に吞まれて、気持ち悪いラプストリーと、暗闇の壁に感涙する人々と、叫び続けるポップコーンの男性も火だるまになってみんな踊った。爛れた肌を振りかざしながら上を目指す火を見送る。天井が落ちてくるのでみんなペしゃんこになって、わけのわからない映画の看板が蓋をした。

上映から三百六十二日目になってその映画は大ヒットしたが、監督は自分の撮った映画の看板に潰されて死んだのでついに日の目を見ていない。私は記念に黄色いチケットの半券を大事に握りしめ、棺桶で大切に育てている。いつか美味しいポップコーンになるんだよ。

塩味の。

20200412

ライトレ お題「タイトル／侍／デュエリスト」

おぼえている

カラスが哭く

地獄の中

各々の

夜の町

夕映えの景色

おぼえている

旅立ちの日

静かにねむる

生きているあなた

を、描いて

20200422

「本気で***になろうと思ったの？」

不完全に終わった『それ』を指で示しながら、向かい合って座るあなたがそう言った。

どこかのフードコートだ。白いテーブルに乗るのは私の出来損ないの記録だけで、食欲は全く湧いてこなかった。

……私も、どうかと思ったから辞めたんだと誤魔化すように笑う。こんなものに価値を付そうとしていた。他の努力への冒涇だからあなたはきっと呆れている。つまらなそうに返ってくる「ふうん」という声に、失望させたのだなと苦しい気持ちになる。

(……………私も、すこしは、)

すこしはがんばった。

すこしは、ってなんだろう。頑張ったうちに入らない。何もかも中途半端で、自分の心地いいようにしかつくってこなかったからこんな結果に終わるんだ。別に、自分ひとりで楽しみたいならそ

うしたらいいんだ。他者に評価を求めようとする餓えた鬼のような意地きたない心がこうやって、信頼していたあなたに仇を返す。

机の上のものを取り下げた。私とあなたのどちらが先に席を立ったのか覚えていない。

大衆のためになるような、多くの人の共感を得るような、全ての人のこころに残るようなものをつくるために苦心しなければならぬのなら、つくりたくない。

私はたぶん、私の中にあるものを知りたいだけだった。私が何者なのかを知りたいし、できれば想定よりも少しだけ綺麗だったり、優しかったり、正しかったりすることを望んでいた。自分の原罪を明らかにして、裁くか赦すかして楽になりたかった。

けどそれでもあなたに伝えたいことはたくさんあった。たくさんあるから、不出来だと分かっても伝わらないと絶望する。ずっと絶望しながらつくってきた。それを「すこしは頑張った」と形容してしまうので、きつと永遠に進歩はない。

あなたに伝えたいことなんて何も無いことにしてしまいたい。その「伝えたいこと」「こそが独りよがりで恥ずかしいものじゃないという保障もないのに。伝わったところで、それがあなたのためになるとも限らないのに。

私は私で他者は他者だという境界がはっきりと見えていた。それを認めるのがずっと怖くて逃げ回っている。自分にとって心地いいものが、他者にとっても心地よかつたらいいのに、と祈りながらつくっている。拾われるのを待っている。

弱くて、甘えが過ぎていて、そんな自分がきらいなくせに、それでもいいと思い込もうとした。それでも受け入れてもらえるという夢を見ようとした。

優しいあなたにすら受け入れて貰えなかった。

(受け入れ、られなくて、よかつた)

心地いいことよりも正しいことのほうが好きだ。私は正しくないのです、正しいひとに正しくないと言われるほうが本当は安心する。きつと本気じゃなかった。

それを再確認しただけだ。

20200629

雲のまく うだる暑さを温めて

帰路にはふたり笑う夕立

Photo Tanka Collection 応募作品

20200816

朝霞 めざまめ絵画の幻想を

すべてこの身にまろぶ束の間

20210202

熱にこの身は狂れる

テネイが振り向くと、白いティーテーブルに肘をつけてこちらにひそやかな期待の目を向けるミシカの姿があった。普段着の膝丈ドレスがくずれた姿勢を花のように描いている。

踊って、と彼女は言った。「久々にテネイのバレエが見たいわ」

「いつの話ですか……。もう踊れませんよ」

「あら、やってみないとわからないじゃない。幼少のころの教養よ、身体に染み付いているかも」

「七つの時に辞めたんですよ。染み付いていたとしても、同じように手足を捌けません」

幼い頃より彼女の側仕えをしていたから、テネイはミシカがまだ話せないころから知っている。

同じようにミシカもテネイのことも時代を知っているのだ、ということも、普段は忘れていた。この主人は、基本的には現在と将来のことばかりを見て語った。思い出話に花を咲かせて懐かしむのはずいぶんと珍しいのだが、まるでこれまでもそうであったように自然に、するすると記憶を手繰っている。どんな演目が得意だったかとか、上手くいかなくて廊下の隅で泣いてたとか、どの衣装

が素敵だったとか。

とはいえどちらかというと、そうやって当時の心情を蘇らせて、その気にさせたいだけなのだろう。思いつきの戯れだ。彼女は今、テネイの踊りを見たいのだ。

「……さて、どうしたら踊ってくれるかしら」

楽しむようなため息をつけてみせてから、澄ました顔でティーカップを傾ける。そこそこに本気のような。こうなってしまうては、宥めすかすのも一苦労である。

「今は守衛ですからね。剣舞であれば教えを乞えばあるいは」

「嫌よ、バレエが見たいの」

「それなら領内の踊り子を召し上げてはいかがですか？」

「テネイの！ バレエが見たいんだってば。往生際が悪いわね」

音を立ててカップをソーサーに戻すので、はしたないですよ、と諷めるが聞く耳も持たない。肩間に皺を寄せて良いアイディアを捻り出そうとしている、飾らない様を見せてくれるのは嬉しくもあるのだが。

追い詰められればどうかしら、などと不穏なことを言い出すので気を抜いている場合ではない。

「火事場の馬鹿力って言葉があるわ」

「なりませんよ。『屋敷に火を放つ』とか仰るつもりでしょうけれど」

「もう、どうして先回りしてしまうの。素敵じゃない？ 揺らめく炎の中、鬼気迫って踊るテネイはこの世のどんな芸術にも勝るでしょうね」

「恐ろしい方だ。貰い手がつきませんよ」

「結構よ。炎に巻かれて屋敷と一緒に朽ち果てるんだもの」

なんとすべきか迷って口を噤んでしまうテネイに、見えないだろうに「おかしな顔」とからか
いに向けて彼女は知っていてそんな悪戯めいたことを言うのだろうか。「もちろん、冗談だわ。私は

このニグラム家をネソミア随一の名家にしなければならぬのだから」

「捕依トルエとの攻防も終わって領内の治安も安定してきたし、王が斃れてまだ権力の在り処は納まりど
ころが見つかっていないもの、家を燃やしてられないわ」

「……安心いたしました」

「あら、なんだか残念そうに言うのね？　いいわ、バレエの手配はしておきましょう。まずはシューズと衣装を仕立てましょうか」

ミシカは機嫌よくころころと笑う。ここまで見越していたのならとんだ策略家であるが、直接触れられぬ内はどうか知られていないことにしておきたいものだ。それは私と心中してくださいと
いう意味ですか”……なんて、馬鹿な問いが脳裏を過ぎったことなど。

20201003

Good bye, your life.

きみは、きみの世界に別れを告げてほしい。

世界の終わりを夢想するとき、どうして最後まで見届けられるような気になっているんだろう。

終わった後の荒廃を、あるいは虚無を、いつだってきみは見ている。終わりは平等だなんて言いながら、夢が目覚めていくようにはだから地球が消滅しても、ある種の細胞が進化の先に限りを見ても、神様の命題に答えが付されて全部がゼロに戻ってしまったときでさえ、きつと最後の最後の、なんならその先まで知っているんだろう。

もし終わりが平等なら、きみなんて、さあ、ちょっと気になり始めたひとの呟いた言葉をつまぐ聞き取れないまま唐突にページが切れた本みたくあっけなく終わっちゃったりするはずなんだよ。それは僕もおんなじだけど。

なにが言いたいのかって、そう、きみは世界が終わるとき、肉体は滅んでも精神だけ魂だけ心だか、そういうものは残っていられると密かに信じているタイプでしょう。自分が信じた、あるいは

育ててきた価値観は未来永劫「せかい」に存在を許されていると、そう思っているんでしょう？

僕はそうは思わないな。肉体が減れば、いや脳が死んでしまえばその時点で、個人の世界なんて霧散してどこにも残らないんだよ。そうでなくては困るというだけなんだけれどね。

でも、証明してみるのも悪くないでしょう？

だからちよつと手始めに、きみにはきみの世界に別れを告げてもらおうか。

もしきみの世界がなんらかの形で遺るというなら、今その口が発したように、僕はいずれ罰を受けるだろう。

それじゃあ、

20201008

#殺すという言葉を使わずに殺すを一人一個表現する

迷鳥の歌

辺りは沈黙に包まれている。

静寂というよりも重たいそれに身を縮めながら、那智^{なち}はとぼとぼと回廊を歩いていた。両脇には聖歌隊のような少年たちが、階段状になった足場に整列して一様に口を閉ざしている。人形ではないかと思うほど微動だにしないけれど、視線だけははっきりと那智に注がれていた。那智は、息をするのも憚られて固く唇を引き結ぶ。

歌ってはいけないのだ。どうしてかそれを知っていた。だから少年たちは沈黙していて、那智も懸命に押し黙っている。もし音の一つでも発すれば……。――。

そのとき、ひらりと羽根が舞うようにソプラノの歌声が遠くから響いた。(ああ、) どうしよう。いけないのに。私の声ではないけれど、(私じゃない、私は……)

嫌な予感がして辺りを見回すと彼らの目つきは敵しいものに変容している。憤怒の表情を浮かべる天使たちに恐れをなして、なんとかしてあの声を止めなければと焦る中、やはりもう一度歌声が

高らかに鳴った。

「やめて……」

控えめなものだったが、咄嗟に言葉が溢れる。慌てて手のひらで口許を押さえても既に遅く、責め立てる視線が無数の矢のように突き刺さっていた。那智はたまらず走り出した。歌を止めなければ。ソプラノは美しい旋律を回廊に響かせている。

ようやくたどり着いた円形のホールは白くあかるかった。息を切らせながら音の出どころを探そうと、自然と上部を仰ぐ。そこに滞留する音は旋回して飛ぶ鳥のように那智には見えていた。

「歌わないの？」

声が出て、はっとしてそちらを見る。那智からそう遠くない位置に白いテーブルがひとつと椅子が二つあって、そこに旅人がひとり座っていた。彼は男の人だったけれど、あの翼を得て飛ぶ歌声は彼の仕業だと那智には思われたので声を潜めて「あれを止めてください」と必死に指差した。

「何故？」

「だって、歌ったら、駄目なんです。私のせいだと思われちゃうから、」

「君は歌っていないのに、どうして君のせいになるといつのかい」

「だって」

那智は次に、あの歌声が本当は自分のものなのだという気がしてきた。あんな自由に、まるでそこに楽園を見つけるかのように、下界の迷惑も顧みずに自分勝手に。美しいものが世界の真実だとしても、それを閉じ込めておかなければならないときがある……というのを那智の歌声は、解りはしないだろう”。上手に檻に入れて隠していたはずだ。それをこの人が取り出してしまったに違いない。

生まれた確信に応えるように旅人は上方へ語りかけた。「歌っておくれ」

歌声はもう一つ重なって、喜びのハーモニーを作る。

ああ、いけないのに。そんなに煩くしては――。

「ねえ、歌姫さん。君はあれを、もう一度捕まえなくてはいけないよ。だってあれは元々君の腹から生まれ、胸に棲み、喉から飛び立った美しい鳥だ。あんなに美しいものをどうして閉じ込め、手放してしまったの？」

那智はこれを、聞きたくなかった。それで無我夢中になってこう叫ぶ。

「知らない、知らない！ 殺して！ あんな鳥、殺してしまつて！」

音楽準備室で壁越しの歌声を聴きながら、那智はひとりパンフレットを折っていた。次のステージで観客に配るためのもので、部員の紹介やこれまでの活動と実績、それから新入部員を募集する記載が写真やイラスト付きで可愛らしく纏められている。彼女はその、部員の名前の欄から自分の名前を消してしまつたらいいんじゃないかと、消されてしまつたらどうしようとか、正反対の心配をさつきからぐるぐる廻り返している。時折憂鬱になつてそつと自分の口許に触れるけれども、息すら通る心配がない。

九年ぶりに声が出なくなつてしまつた。病気とかではなく、過去の習慣によるものだ。八つまで祖母のいる田舎に暮らしていたが、閉塞的なその地域では女性が口を開けることを歓迎しない。食事も普段の会話もほんの僅かだけ唇に孔を通して行い、不要な場合は声を出すことも厭われた。歌

なんてもつてのほかで、幼い那智に至っては自分も男の子たちのように大声を出したり歌ったりできるといふこと自体知らないなんて有様だった。町に引越してきてからも声を出すのは得意ではなかったけれど、やがては周囲に馴染めるくらいになって、かつての習慣もすっかり忘れてしまったのではと思うほどだったのに――、ある朝突然、口を開けなくなつたのだ。

うたえません。そう伝えた静かな音を顧問の教師は何度も聞き返しわけを問い糺したが、今の那智には長々とした説明はできなかつた。音を連ねるごとにひどい罪悪感が募つて、言葉はだんだんと掻き消えていってしまう。流石に様子が可笑しいことは察してくれたようで、しばらく練習を休むよう勧めたり、保健室にカウンセリングの手配をしてくれたりもしたのだがそれもまた申し訳なくて心に重かつた。

休憩に入ったのか音楽室側の空気が和む。ノックののちに部長が現れて「那智も休みなー」と一声かけてくれたので、頷いて席を立つた。

「そういえば、那智や」

音楽室とを隔てるドアをわざわざ一度閉めて彼女が振り返る。「今回、乗る？」

どきりとした。省略された『ステージに』の言葉を探すように視線を返すと相手は気まずそうに慌てて、変な意味じゃなくてね、と続ける。

「また歌えるようになったら普通に乗ればいいんだけど。その、歌えないままだったときに……出れば一緒に乗ってほしいって私は思うんだけど。みんなで頑張って準備してきたし、さ、でも、□パクとか那智が嫌だったらと思つて……」

「……」

そんなの、迷惑じゃないですか？

問いかけた言葉は鼠返しでもあるみたいに胸から上がつてこない。那智は過去の習慣に倣つて静かに臉を下ろし、少しだけ首を垂れた。

それを部長がどのように捉えたのかは分からなかったが、よかつたらまた相談して、と困つたように笑つてドアノブに手をかけた。すると急にノブがおりて「話終わりました？」とひとりの生徒が扉から顔を出す。

「ぎゃー！……維羽いろう！……びっくりさせないでよ」

「さーせーん。なっちー自販機付き合っつよ」

言うや否や彼女は頭を引っ込めてしまった。その素早さに部長と顔を見合わせたか、先に向こうが破顔して「行ってやって」と戸を開けるのでまた軽く礼をして維羽を追いかける。

音楽室の戸口で待っていた彼女は那智が追いつくとその手を取って引っ張った。那智は、戸感っていた。学年は同じだがクラスも違って、特別仲良くしていたわけでもない。全く話さないわけではなかったけれど、わざわざ連れ出されるような間柄ではなかったのだ。那智個人の視点だけでいえば、維羽のことを少しだけ気にかけてはいたのだけれど。

「部長もぶきつちよだよねえ。あの言い方じゃほんとは降りて欲しいみたいに聞こえちゃうよ」
「……」

聞いてたの、と心の中でつぶやく。まあ、聞いていたんだろう。そういう登場の仕方だった。

「一応フォローしとくけど、あの人ほんとのほんとに歌わなくてもいいから一緒に乗って欲しいって思ってるみたいだよ。練習にもできれば混ぜてほしいみたい」

ずっと気にしてるんだよね、と溜息をつく維羽はやれやれとでも言いたげだ。本当に一年生なん

だろうか。

繋がった手の温度差を感じ始めて、なんだか居心地が悪くなる。維羽のほうが温かいような気がするし、冷たいような気もした。

「私はやだけど」

足が止まる。彼女が振り返ったのと同時に手は離されて、手首はすつと寒くなる。

この廊下は不思議としんとしていて、ほかの部活はやってないんだろうかといつも心細くなった。その静寂に、「那智には歌って欲しい」と確かな声音が生まれていく。

「歌えなくなる前の日さ、覚えてる？ パート混ぜて練習して、私となっちー、隣になったの」

那智はこれを覚えていた。歌えなくなる前日のことだというのは意識していなかったけれど、確かに言われてみればそうだった。

ぎこちなく頷くと維羽は「あのときますごくいい感じだったじゃん。今まで聴いた中で一番良かった」と接ぐ。「私絶対、なっちーには歌って欲しい」意思というよりもむしろ決意のような音をしている。部長のそれとはまた違う——つまり部活動の仲間意識とかそういうものとはどこか遠い、鬼

氣迫った表情だ。

それはすぐに翻って、いつもの軽薄なかんじの微笑みとともに「こんな御伽噺、知ってる？」と維羽は切り出した。那智が話さなくてもおかまいなしなところは今とても助かるけれど、気を遣ってくれているのではないかと心配にもなる。維羽の自由奔放なところが好きだった。その姿に憧れていたから。

階段を一段一段降りながら彼女は聞いたこともない物語を語った。

「…むかし昔、美しい音を食べちゃう魔物がいたの。歌や、女の人の優しい声も大好きでね。魔物に食べられちゃうから近くで暮らす人々は口をつぐんで生きていた」

あるとき偉大な魔法使いが街に立ち寄って、話を聞いた彼は人々に、声を鳥へと変える魔法をかけた。すぐに放てば魔物はその鳥だけを食べるので、街の人達はまた言葉と歌を取り戻すことができた。

しかし一人の娘が、生まれた一羽の歌の鳥をあんまり可愛く、愛しく思ったので、蔵の中の鳥籠

に入れて空に放たなかった。すると魔物は美しい鳥の囀りの出どころを探って手当たり次第に街の人達を襲い始めてしまった。

娘が慌てて鳥を放つとその歌は美しく鳴り渡り、羽を広げてあっという間に空の彼方へと消えていった。魔物もまたそれを追いかけて飛び去り、街には平和が訪れた――。

維羽は踊り場の窓から空を眺めている。なんとなく那智のほうも、階段の天井を仰いだ。何かあるような気がしたけれどそこには蛍光灯がそれぞれの位置に行儀良く並んで収まっているだけだ。どう思う？と問う声がそこに響いて視線を戻す。

「なっちはさ、この『娘』のこと、悪い人だなあって思う？ 人々を危険に晒すかもしれないのに、『歌』を閉じ込めたりして」

那智はあんまり悩まずに頷いた。結果的に魔物がいなくなって街は救われたかもしれないが、それでも人が襲われたのだ。

けれど、相手は「そうかなあ」と小首を傾げる。維羽のふんわりとした二つ結びの片方が、肩の

上で身を振った。

「私は魔法使いのほうがよっぽどひどいと思うな。食べられる為の鳥がそんなにキレイだなんて」

「……」不思議なことを言うのだな、と考える。確かに言われてみれば、そういう見方もあるのだからどうか。

「それにさ、可哀想に思うよね。歌も言葉もきくと、誰か別の人に届けるためにあるでしょう。他の歌や言葉と飛び交って遊んだりすることもできるのに、魔物に食べられておわりなんてそんなの可哀想」

……そうだろうか。美しいものが世界の真実だとしても、それを殺さないといけないときはある。そもそも、生み出しさえしなければもっとよかった。そうすれば可哀想な鳥もないし、魔物も人を襲わない。

なんだか気分が悪くなってしまいそうだったので、やっぱり深く考えるのはやめて首を振った。悲しいような、自分のことが許せないようなどうしようもない感情が胸に蟠っている。ふいに口に息が通っているのを感じたのに、慌てて止めてしまった。歌が戻るかもしれないのに——いいや、

取り戻しているのだろうか。

那智は自分が、歌ってはいけない気になっているのにそのときやっと気がついた。罪悪感が募るのだ。言葉よりずっと。

それを見ていた維羽はなんだか残念そうに小さく苦笑して、ここには魔法はないからなあ、と呟いた。改めて笑みを作った彼女が次に、「なっちーってなんで合唱部入ったの？」と問うてくる。

この質問を彼女にされるのは那智にとって特別なことだった。それでどうしても答えたくて、止めた息を解放してしまっ。

「懂れてたから、」

「歌うことに？」

「あ、朝倉さんに」

私？ 不思議そうに自分を指差す維羽を一生懸命見つめながら、那智は二度も三度も頷く。

彼女を初めて見たのは七歳の頃だった。小鳥のような愛らしい歌声が聞こえるのにびっくりして

家の窓から顔を出すと、見知らぬ女の子が歌っていたのだ。そう——女が声を出してはいけないあの地で、大口を開けて。

たぶん、他所から来ていて村の習慣を知らなかったんだろう。やがて男達が集まってきて物凄い剣幕で彼女を叱りはじめたものの、拙い言葉で果敢に反論した上、最後には彼らの手を逃れて行方をくまらずその一部始終を那智は見ていた。

それから毎日、歌う少女のことを考えた。自分も歌えるんだろうか、と夢見て、居ても立ってもいられなくなって母親に「うたってみたい」と打ち明けた。母は驚いたけれど、すぐに父にもそれを伝えて村を出る決意をしてくれた。元々父も婿養子である村に入ったひとだったので、抵抗がないどころか娘のために是非出ようと考えてくれたらしい。そうして移り住んだ町で沢山のことはや歌に触れ、こちらでの当たり前前の生活が那智にとっても馴染み深くなり、小中と学年を進めて——入学した高校で、再び彼女を見つけたのだ。

「むかし……田舎で、歌ったのを怒られなかった？」

「……あー、そんなこともあったかも？」

「そこに住んでたの。だから……」

不思議とすぐに彼女だと分かったのは、その声の色をずっと思い返していたからかもしれない。合唱部に入ったのは、けれど、確かに歌うことに憧れていたからで、維羽が入部するかしないかまでは念頭になかった。一緒に歌えるのだと知ったときは本当に嬉しかったけれど、そんな話をしたら驚かれるんじゃないかと思つてずっと黙つていた。

全部を聞いていないのに維羽ははにかんで笑つてくれる。「嬉しい」

「追いかけてきてくれたんだ？」

「そっ……」「そついうわけじゃ。だけど広い意味ではたしかに、「そつかも……？」

「ふっふっふ」

含み笑いをしてから改めて、うれしい、と零す彼女の声音。きつと鳥に変化したら素敵な色をしているに違いない。そつ思つたら、たとえ食べられてしまうのだとしても、「言わなければよかった」なんて後悔は絶対してほしくないものなんだとわかる。那智の歌のこともそつ思つて貰えるんだろうか。そつ思つてくれたから、こつして手を引いて空の下まで連れてきてくれたんだろうか。

彼女はまた、那智の手をとった。維羽の手も、那智の手も、どちらも熱を持って温かい。

「なっちー、忘れないでね。たとえ歌わなくても、歌えなくても、歌はいつでもすぐそばにいるよ。それは君の腹から生まれ、胸に棲み、喉から飛び立つ準備をしているの」

きつと、誰かを明日に導く為に。

囁きは心に降り立って、閉じ込めた感情を放つ。吹き返した息で那智はただ、「うん、」と答えた。

白いホールの天井が吹き抜けていた。そこにはもう鳥はいなくて、ただ風だけが吹いている。

旅人が席を立つ音がしたので、那智はそちらに視線を移した。

「もうここには魔法はない。けれど、魔物もない」

穏やかな声がそう紡いで、彼は微笑んだ。

「歌って、いいの？」

「歌っておくれ。あの日の鳥の美しさを——ずっと、忘れられないでいた」

どこからかソプラノの歌がひらりと舞い降りてくる。美しくて、自由で、いつか手放してしまうものに似たそれは、たぶん彼の仕業。

嬉しくなって空の真下へ歩みを寄せた。その遠いあおの先できっと、誰かが耳を澄ましている。

20201212

アドバントカレンダー企画【創作小説】みなさんのSSをください」参加作品

おやすみ、パラクシイス。

こんにちは、わたし。

わたしという外郭、あるいは名前。まったく知らないあなたがわたしと同じ名前を持っていて、大きさも色も違うのにそう呼ばれる外郭。記憶の共有はこれから。ぜんぶを移すのはむずかしい。

ぜんぶ？

全部そのままを引き継ぐことができたなら、わたしとはなんなのだろう。反対に、すべてを受け渡すことができないなら、わたしの存在意義とはなんだっただろう。

心臓の音がする。これからわたしに為ろつとする、あなたの心臓の音。

箱を開いた時はじめにあなたを照らしたのは海だった。それを知っているのはたぶんわたしだけだ。あなたに告げられることもない。

わたしには名前がふたつある。あなたもきつと、これからもう一つを名付けられるのだろう。
そのときわたしとあなたは明確に分かれる。わたしが眠りに就いたあとの世界の話は、あなた
しか知らない。

20201220

機種変更記念

ベリーグッドナイト

たくさん飲んだ。飲み疲れた。

冷たいアスファルトを腰に感じながらゆらゆらと身体を揺らす。ああ、夜空ってこんなにまっくらなんだなあ。こんな、ナントカって画材で塗りつぶしたみたいに黒いだけだったっけ。星とか月とかいうのなかった？

体温をいらずに逃しながら俺はただ茫然と空を見上げていた。時刻は三時を回っており、このあたりじゃもうタクシーもやってない。あいつはいいよな、かわいい嫁さんが迎えにきてくれて。俺なんか実家も県外だからこんな時間まで付き合わされたら歩いて帰るしかないってのに。

少しずつ寒気が忍び寄ってきているのをなんとなく感じていた。そこから目を逸らすように、は、とひとつ息を吐いてみせる。ああ白くもならねえ。じゃ、そんなに寒くないんだ。

「冬なのにな………」

眩くと途端にさみしい気持ちになった。せつかく冬なのに、なんでだよ。なんだよ。誰しもが当

たり前に携えている幸いを俺だけが持つていないみたいだった。温かい夜だと言えればきつと悪くない日だったろうに、かすかな愉楽も寄り辺なく形を為せなくて、最初からなかったのと同じ景色を見せる。こんなことなら、安い焼酎でも飲んで吐いとくんだった。ろくな場所で寝れないとわかっていて守りに入った飲み方するくらいつまらない大人だ。

ぐずるみたいに唸りながら身体を横たえる。腕と頬と耳が冷たくなって不快で、余計に泣きたくなかった。

「あらら、こんなところに」

気がつくとも視界に白い何か映っていた。一台の車が歩道に寄せて停まっっていて、その運転手らしき人が俺の側に立っている。真っ白な車は花がわんさか咲いていた。これは決して俺が酔っ払って夢現だからってわけじゃなくて、窓からはみ出る様にしているんな花がほんとうに生えるみたい。に車を飾っているのだ。

パーカー姿の人物は俺のことをひよいと抱えた。お姫様抱っこだ。人生で初めてそんなことをされたけれど、不思議と嫌だとは思わなかった。たぶん、もう誰でもいいから触れたかったんだ。触れられたかったのだと思う。俺にだけ、とくべつに。

「なに、あの、はな、しゅみわるい」駄々もこねたくなってそう言つと彼は爽やかに笑いながら、「天国の車なんで」と答えた。なにそれダサイ。

「連れて行っていいですか？」

母親が赤子にするのとおんなじ様に鼻先を近づけて、ひっそりと問いかけてくる。そのまま、くちづけとかしてほしかった。してくれるんなら何処へでも行こう。冬だから、誰かと寄り添っていなければさみしい。

彼は返事を待たないまま花まみれの車内に俺を詰め込んだ。いい匂いがして、アルコールに騙されるよりもずつとやさしく眠りにつけそうだ。次に目が覚めたら温かい場所において、彼が手を差し伸べてくれるのだろうか。

真夜中の道にしんしんと花が降りている。眠りにつくひとりの孤独を、大事に抱えるように。

20200106

即興小説トレーニング お題「天国の車」必須要素「パーカー」

オフンジェット

過ぎ行く木々のみどりを眺めている。

電車の薄汚れた窓越しに、岡田はこれまでのことを振り返っていた。それは遠い過去のことであつたり、今日、ついさっきの出来事であつたり、取り留めもない。空はぼんやりと晴れていた。その薄青をどのように捉えるべきか迷っていたのかもしれない。

高校生のとき、県外へ出るならこのこと決めていたところがあつた。結局岡田は地元に残つたので縁のある県とまでは言わないが、同級生のいくらかはそちらへ移り住んでいるので折に触れて訪れてはいる。その間だけ当時なんとなく描いていた未来図の合間に漂っていられる気がしてきらいではなかったし、県境を越えたのを確認したところで現在の人生にきちんと立ち返れるのを感じていたので、慰めは慰め以上のものにはならず済んでいる。それを、自分は賢く生きているほつだ、と評価していた。

まだオレンジジュースを飲んでいたな。村上の手元の景色を切り取って脳裏に映し出す。昔もそ

うだった。確かいつも、オレンジジュースを飲んでいた。

岡田をファミリーストランに呼び出した村上は、高校時代のクラスメイトだ。友人、という程の仲ではない。三年間クラスが同じだったし、自然に言葉を交わしあたりはしていたが、正直好んで話したい相手ではなかった。嫌いというほど鮮烈な感情がある訳でもないし、いけ好かない相手だと言ってしまうには不十分なだけの、距離があったように思う。村上もそれは同じだったはずで、人数がいればそれでもないが二人だけのときなど、居心地の悪い沈黙が降りるのが常だった。

居心地悪い。そうだ、彼との関係は居心地が悪いものだった。

「結婚式のさ、友人代表スピーチ。お願いしたくて」

「俺に？ どうして」

勝手に注文されていたドリンクバーのアイスココアを徒にストローでかき混ぜていたのも多分そのせいだ。先に入店して席を取り、勝手に注文して勝手にココアを注いで岡田のことを待っていた

村上は「お前アイスココアでしょ。俺覚えてんの。偉くね？」と軽い挨拶の次に宣っていた。あんなか、こういうところが嫌だと思っていたなと記憶が蘇る。押し付けがましいというか。自分に自信は無さそうなのに、こうして得意げに、懐っこい態度を取るところ。

そもそもたまの連絡を取り合うような間柄でもないので呼び出された時点で違和感があった。違和感、だ。疑問というほどではない。先の通りこの男は昔から親しげには声をかけてきたし、思いつきで何年も前の大して仲良くもない知り合いを呼び出そうとしそうな軽薄さはあったから、断る理由もなかった。当時も岡田はそのように、およそ求められているであろう接し方をしていたと思う。

だがそれは、もちろん、村上の方が大した意味も持たずに接してきているのだとわかっていたからだ。別にこれ以上近付きたくないというのをわかっていたから、適当に返すことができた。今回のは少し話が違う。「俺より仲良い奴いんじゃないか」

村上は全然わらいたく無さそうに破顔して、けれど目は逸らさずに答える。

「いいんだよ、相手も、好きで俺と一緒にになるわけじゃないから」

岡田は長くため息をついた。もっと隠すべきだったかもしれないが、思い至るのが遅かったので仕方がない。目を逸らしてわずか逡巡するが、踏み込みたい内容でもないしそういった期待はされていないだろうから委細は置いておく。元々ころころ彼女が変わる男だったからそういう手順を間違えたという話かもしれないし、相手の目的が村上自身でないと知っていてそれに甘んじるという話かもしれない。なんにせよ、村上の方もこの結婚をそんなに歓迎しているわけではない。無さそつだった。だったら尚更、せめて祝いの言葉くらい親友とかに頼めばいいのではないだろうか。岡田は思う。曲がりなりにも一生に一度だ。一応、そういうことになっているものはずだ。

しかしそのように言い募れば「お前さ、生真面目よねー」と揶揄される。くるくると、飲みもしなくせにオレンジジュースをかき混ぜている。「どうせすぐ終わるしさ」夫婦関係が、と言外に言っていた。

「ま、そんなときは飯でも奢るからそれで許して」

「お前それ、……そういうの、軽々しく扱うの、やめろよ」

「あ！ それ」ストローを摘んだままの手がこちらを指差す。「きらいだったなー、俺、言われんの。」

『やめろよ』ってやつ」

岡田は呆れた。呆れたが、それと同時に妙な共感も得てしまったので僅かに表情で示すに留める。

村上はしばらく岡田のその顔をじっと見つめていた。落ち着かなくて視線を逸らすのを、たぶんまた笑った。「岡田さー、」

「よく俺のこと覚えてたね。別に仲良くもなかったのに」

「……お前こそ。てか、そんな相手を遠方から呼び出すなよ。来ないとか、考えないわけ？」

次に見たときは目を伏せていたので少しは気が楽になる。目を合わせないほうが普通だった、というわけではないが、妙に真っ直ぐ見つめてくる瞬間が今日は多いように感じていた。その真意が見えなくて気持ち悪い。手元のココアは氷が溶けて薄まろうとしていて、それが嫌で少し口をつける。流石に村上は、岡田がドリンクバーの飲み物には氷を入れないということまで知らないのだ。

「駄目だったらその時点で敗けだからさ」

続いた言葉にも若干気分を悪くする。「なんだよそれ。俺が敗けたみたいにな」

「違うよ、これは俺ら二人の勝利」

そう言って彼もまたストローを啜えた。

「何と戦ってるの？」

「人生？」

一気に液体を減らしたコップの中で、露出した氷が身の置き場のなさそうに僅かくずれた。怪訝な顔をした岡田にまた視線を遣る村上は、どこか何かに縋りたそうにも見える。ひといき置いて、ぶっちゃけさ、と神妙に問うた。「お前って、俺だけは見下してたかったんじゃない？」

不躰な質問だと思っただが、たぶん承知の上で言っている。つまるところ、それは凶星だった。村上にだけは優れていたような気持ちがあるが確かに岡田の中にはあって、だから彼の現住地がかつて憧れたこの土地にあるとわかったときも、結婚式という単語が飛び出した時も、微妙な敗北感が滲んでいた。その上、瞬間的に「村上はどうしようもない人間だから、どうせ内実もくだらないものだろう」と侮る気持ちをかき集めて自分を慰めてしまう。

けれどそれは、村上も同じだろう。

相手は聞いてもないのに断るみたいに、「俺もお前のことだけは格下って思いたかった」と妙に

耳心地のいい声色で告白した。やはりそうか、と思つ感情は安堵に近い。

「で、だから」村上はコップを置いてもう手を付けない。「お前にやってほしいの。その方がわかるじゃん、『あ、今最低なんだな』って。後からでも『まああれはあれでいいか』とか、思わないでしょ」

「でしょ、とか言われても……」

渋った反応をしながらもイメージは明瞭に浮かんでいた。雰囲気に吞まれて、納得なんかしてないくせに最初からそれでよかつたかのように思い込んで適当な言葉を並べて笑う村上が。これはこれでいいんだと、いっそ周囲にも手放しの肯定を強要するような、あるいは深く考えさせないような、嫌な感じ。岡田はそれを快くは見えていられないだろう。そしてきっと、村上も不快であることから逃れ切らないような、居心地の悪そうな態度を取るのだ。

考えさせてほしい、と答えを返した岡田に、村上は「じゃ、まあ、招待状は送るわ。住所どこ？」とやはり軽薄っぽく話を進めていった。氷を溶かすだけになっていたココアには結局、あれ以上口を付けなかった。

ふと気がつく、景色は県境の向こうだった。しまったと思って往生際悪く振り返ったりなんかするけれど、消えたと思っていた憧憬が羨望にすり替わって胸に居座るだけだ。岡田は長い溜息をつく。

ひとりになってから何度か、スピーチの内容を考えてみてはシミュレーションをしていた。きつとそつなく話せるだろうし、当たり障りなく、誰も不快にはしないもの出来るだろう。ただし村上を除いて、だ。当然岡田にとっても良い記憶にはならないに違いない。そもそも村上だってそういう想定でいる。人生の節目に釘を刺しておこうと決めて、岡田を選んだのだから。

これでよかったと思いついで本心を誤魔化していることが岡田にもある。たぶん岡田と村上は同等で、そういった悪癖が自分と重なって見えて、それから逃れようとする手段が違うから目に余るのだろう。岡田のいない人生は彼にとっていくら心地いいものだったはずだ。岡田にとってそうだったように。

二人の勝利と彼は言ったが、本当は逆ではないだろうか。疑う気持ちは、けれど眺める空の色と同じくらいぱっとしない。逡巡も流されていないふりをするための泳ぎ方のようなものでしかなく、彼の依頼を断る術も実は持っていない。それを知ってか知らずか、別れ際に村上は「お前のクソ真面目なスピーチ楽しみにしてる」と言っていた。心にもないことを、と軽蔑する感情は、当日彼が抱くものと同じに違いない。

どこからかオレンジの香りが蘇ってくる。それは鼻の奥を通過して薄いココアの味と一緒に、舌に残っている。

20200930 第十七回坊ちゃん文学賞応募

20210128 公開

一途の悪夢

今夜あたり君が女の子を振るんだらうと思ったよ。

勝手に部屋に上り込んで人のベッドで肌着でくつろいでいる最悪の女が、家主を目線で出迎えて最初に言ったのがこれだ。その頬にはうつすらと笑みが滲えられていて、嫌だな、と思ったから素直に顔をしかめてみせたのにユキヒは静かな笑い声をふたつ溢す。

「最低なんだけど」

「恋人がいるときに乗り込むより幾分かましでしょう」

仰向けだった体勢を寝返りをうって変えて、彼女は機嫌よく両足を泳がせる。どうせ入って待ってるなら皿洗いのひとつでもしてくれたいのに、と悪態をつけば「気持ち悪いでしょ、わたしが君の生活に手を加えるのは」と基準も意味不明な価値観を押し付けられた。「いまさら大して変わるんないよ」

一番最初の彼女だった。恋しさと寂しさの違いもわからない頃から付き合って別れて、のちに友

人ですらなくなつて關係を絶つたはずなのに、時折こうしてふいに現れる。たとえばそう、恋人を振つた夜なんかに。

「まだ男を傷つけて回つてゐるわけ」

「うん。でも今日は君を慰めに來たんだよ」

「願ひ下げ。嘘でしょそれ」

「ばれちゃつた。じゃあ、慰めて？ 今日男をひっかけ損ねたの」

「やだ」

つれないなあ、という声は力なく満足げで、甘い。俺にはよくわからないけど、ユキヒにはどうも一度惚れ込んだら二度と戻れなくなるような天性の魅力があるらしい。高校時代には既にその才能を開花させ、行使しはじめていた彼女は、大人になった今も男を食い物にして生きていた。つまりその魔性でもつて、人を振り回したり騙したり、恥をかかせたりして遊んでいるのだ。金品とかステータスとかを求めているわけではなくて、あくまでユキヒの目的は後悔させるために誘惑することにあつた。そういう悪魔みたいに。

しなやかな腕のあいだからよこしまな瞳がひたとこちらを見ていた。それを見下して返しながら、彼女の肌に触れることになってしまった夜のことを思い返す。

学生時代だ。

当時はもう、遠慮した表現で言って友人でしかなかった彼女はやはりよく俺のもとへ現れた。仕方がないから適当にあしらうのは一緒でも、この頃ユキヒは爛れた関係を作っては壊していることを隠すようにしていたから、「からだ大事にしてる？」なんてときおり問ってしまう不用意な過保護を、笑って安心させていた。

今はないから、と。

「……前から思ってたけど、その『今は』ってなんなの」

「他意はないよ。昔は、に対する『今は』」

「今後は？」

「心配してくれるの？」

ふふ、と笑う声が出たから、そのとき他所を向いていた俺は彼女を振り返った。沈黙した部屋で、あのとときもそう、同じような目線を送ってきていた。

もしかしたら、と思っってしまったのを覚えている。

もしかしたら、やっぱり自分になら、彼女を癒したり救ったりできるかもしれないって。

だから彼女が求めたように触れてみた。一度だけ、その夜だけ。けれどあまりに垢抜けた応えかたをするからだんだん嫌な予感がしてきて、全部を終える前に問い詰めた。本当にあれから、自分のからだを守ってきたの、と。

そしたらユキヒは次のように答えた。

「君がこれでわたしのからだを大事してると思うなら、昨日も一昨日もわたしはそうしてきたことにならない？」

窓から入ってくる街明かりが変な風に彼女の輪郭線を描いていて、ああ騙されたんだな、という実感がすぐに頭に浸透した。それから、この女はもうだめだな、と。いつの間にか形勢が逆転していたのを乱暴に突き放して、罵る言葉も上手く見つからなくて「ならない」としか言えなかったの

を今でも口惜しく思っている。

ユキヒはそれに、「ざんねん」と軽々しくも往生際悪く痛そうに、返してみせた。同じ音を聞いたことがあって、いっそ敗北感にも近い苦い感情が再び湧き起こってくる。

そこから遡って一番最後にその声をきいたのは、高校生の頃だ。三年の夏まで付き合っていた。夏休みの間に、ユキヒがお金を貰うタイプの夜遊びをしていたのをたまたま見つけてしまったときのこと。

制服姿で知らない大人に札をもらってついて行くこととするユキヒに驚いたし、そのとき俺は彼女を守らないといけないと強く心に誓っていたからつかまえて、律儀にお金を返させてから逃げ出して、落ち着いてから事情をきいた。事情を聞く、ってというのは「何かあったの?」とか「どうしちやったの?」とかそういうやつだ。つまりそこまで俺は、彼女はそんな悪徳とは対極のところにいる存在だと信じていた。

「もしかして、自業でも起こしたの。でも、ここのうのはユキヒにとつて……一番よくないよ」

「……………」

「俺が……、ま、守るよ。絶対ユキヒを守る」

「……アハハっ」

俺の言葉に驚いたようにこちらを見た彼女が急に笑い出して、だから苦しい夜は頼つてと続けたかった喉はつかえて音を発しなくなった。思春期心にやっぱ今の台詞はクサかったのかなと恥じるのも束の間、温かくなるような笑顔で「ごめん」と謝るユキヒがその口で「なんか今更で」と言い出すのを、いっそ不思議な気分になつて聞いていた。

これがはじめてじゃないよ、と告白するのを。

そこからユキヒは今までどんな男たちを相手にしてきたのか順に挙げ始めた。明らかに小遣い稼ぎや憂さ晴らしのためではない、当時のクラスメイトや俺の部活仲間にも話が及んでさすがに、彼女をなによりも優先して擁護する気持ちは押し負けてしまつて、そんなのは浮気だと声を荒げた。彼女はまた笑った。「そうだね」

「……………」それで、君はこれからわたしが同じ気持ちになつたときに守ってくれるの？」

「おまえっ……」

「ふふ、何から守るのかな。いつもわたしから誘うのにな」

「馬鹿にしてるだろー！ 願い下げだよこっちだってー！」

会話は、「じゃあ別れちゃうっ」と続いて、俺が肯定して、ユキヒの「げんねん」で終わった。その場にいられなくなって走って家に帰る俺の耳にどうしてか痛々しく彼女の声が残ったのを覚えている。そのとき一緒に、なんでユキヒはこんな最低な話をするときにもあんな笑顔でわらうんだろってぐるぐる考えたのも未だに思い出す。だってどっちかわからない。可笑しいのか悲しいのか、楽しいのか苦しいのか、外から見たらわからないのに。

“あのとき”もそうだった。

「ユキヒ……っ？」

俺の家は両親が遅くまで働いてるから、夜九時とかならまだ帰ってこなかった。だからひとりであることが多かったけど、たぶんユキヒはそれを知ってたから、他の誰でもなくて俺のところに来

たんだと思う。

玄関を開けたら薄汚れたセーラー服を誤魔化すみたい「へへ、」と頼りなく笑う彼女がいた。「ごめん、……お風呂借りたくて」

声が震えてるのに気づいてとりあえず家に上げた。もともと気が弱くて他人にどんな言葉をかけたらいいのかわからなかった俺は何も聞けなくて、言われるままに風呂を準備してタオルと着替えを渡してユキヒが出てくるのを待っていた。

やがてすっかり身綺麗になった彼女がすこし自信なさげに「大丈夫かな、変じゃない？」と問うてくるので戸惑いながら頷くと、ようやくいつもの調子を取り戻したようだった。安心したように笑って、「ゴーカンに遭ったって、わかんないよね」と念を押す。そこでようやく彼女の身に何が起こったのか分かった俺がショックで言葉を失うのをまた申し訳なさそうに笑って、大丈夫って言うて、とやはり少し震えた声で続けた。

「君が大丈夫って言うてくれたら、わたし、大丈夫だから」

——彼女の行いの数々は、もしかしたらあの不幸の復讐のようなものじゃないかと思うことがある。それでも幼子が友達を探すのと同じ言葉で獲物をひっかけているのだと思うとぞっとするし、多くの感情を裏切られたことを許せるほど出来た人間でもない。

「出てって」

俺が側へ寄って見下ろすので、それに合わせてまた背中をベッドに預けた。彼女の腕が伸びてきて、やわらかそうな指先が俺の頬に触れようとするのを、しかし止めないでいた。どうせ触れられないんだと知っているから。

ほんの数センチまで伸ばした手をやっぱり躊躇わせて、ユキヒは眩しそうにこちらを見上げる。

「……わたし、君のことだけは一生かかっても汚しきれないだろうな」

思わず、口角が上がった。

「そう？ 十分汚されたと思ってるけど」

この笑みはきつと凶悪な色をしただろう。それを見てなお、相手は先の言を訂正しない。俺がど

んなに性格悪く笑って見せたって、どんなにひどい言葉で女を振ってきたって、もう汚れきったと信じて誰のことも愛さなくなっちゃって、ユキヒの目には俺がまぶしくきよらかに映るらしいと、気づいたのはいつのことだろう。思った通り「君はずっときれいなままでよ」と返ってくる赦しがあるから、確かにこの悪魔の来訪は慰めの役割を存分に果たしてくれていた。それを彼女が知っているかどうかは定かではない。

ユキヒは懲りずにかいなを広げて、彼女の永遠の悪夢の中に誘おうとする。いつか、まだ恋を知らない純粋な存在だったときと同じ言葉を使って。

「ねえ、わたしとあそんでよ。」

20200930 第十七回坊ちゃん文学賞応募

20210128 公開

才能について

「いいよね、作りたいものを明確に形にする才能がある人は」

「何言ってるの、お前だって形にしてんじゃない。書くの早いし」

「……僕のは違う」

「何が違うんだよ」

遅筆の俺に喧嘩売ってるの？と彼がじゃれつく言葉が続ける。そういうわけじゃない。形にできるかできないか、の話ではないのだ。

ただこれは、

「……お前にはわかんないでしょ」

どんなに短いものしか書けなくなつて、完成しなくなつて、才能に溢れて美しいものが正義だ。芸術とは、創作とはそういうものだ。僕は信じていた。友人はそれで言うと「正義」側の人間で、彼の作る物語にはきちんと魅力が宿っている。

僕たちの目線の手先で確かに輪郭を描き出された作品がきらめいていた。その光の粒は想像主を楽しそうに彩どり、この世界に存在する事を許している。紛い物ではないものたちだけが許されていた。うつろな創造物はただこの世のスペースを消費する悪でしかないのだと、才能を持って生まれた人々は知り得ない。

やさしいことばで生殺しのまま延命しないでくれ。「作るのをやめろ」と言われたほうが救われる人間だっていることを知って、その死体を踏み締める感覚に一生呪われて生きてくれ。そうしたらきっと安心して眠ることができる。

その日の朝は、目覚めて一番に物語きみに会いに行こう。なんのしがらみもなく彼らの才能を愛せたらどんなに楽だろうって、夢想をしながら、けれどうつつには。

僕の手には張り付くようにペンが握られている。

作品集「ig」

初版発行／2022年5月18日

著者／外並由歌

発行／ckt

連絡先／sotonamiyuta@outlook.jp

使用フォント一覧

和田研細丸ゴシック 2004

Baskerville

Mgen+

なごみ極細ゴシック

本書を無断で改変すること、内容を転載すること

再配布、販売することはお断りいたします。

私的利用の範囲でお楽しみください。

